

退職特集

“次代を

桜咲く春。卒業式を終えたキャンパスに夢いっぱい、希望いっぱいの新入生を迎えます。これに歩調を合わせ約2400人の教職員も定年退職、異動と年度末、年度始の慌ただしいシーズンです。

時の流れを告げる新旧交代。伝統への年輪が刻まれます。4月から国立大学法人として新たな出発をする山大にとって例年とは異なる節目の年です。今春の定年・勸奨退職者は42人。「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」（山大理念）を築き、支えてきた人たちです。

退職者の有志に「思い出、展望」の寄稿をお願いしました。

学園紛争から法人化まで



重岡 徹
教育学部 教授

教養部の頃

山口大学に赴任したのは昭和43年4月です。今はなき教養部であったわけですが、時あたかも中央の学園紛争が地方に波及しつつあった頃で、赴任したとたんに、大衆団交やら封鎖やら機動隊導入やらに巻きこまれてしまいました。

大学本部（現在の1号館。当時は2号館はまだ建っていなかった）と共に教養部も学生によって封鎖され、後期末試験が実施できず、教官会議もキャンパスの外でやらねばならなかったことなど、懐かしく思い出されます。私は昭和

50年の10月に教育学部へ移籍しましたが、教養部在籍中は、恒例の年中行事になってしまったかのように学生による試験ボイコットがあり、春休みを満足にもらった記憶がありません。後期末試験をどう実施するか、ということを中心に対策に明け暮れていたというわけです。

しかし山口大学在任36年間のなかで、あの頃がいちばん楽しかった。と言うと目をむいて怒りだす先生方もいらっしゃるかもしれませんが、まあそのような先生方はあらかた退官していらっしゃるでしょうから、この文章を目にすることはないだろうということにしておきます。私も赴任したばかりで、学生気質が抜けない（いまだに抜けていないと同僚は言いますが）時でもあるし、もともとお祭り騒ぎが好きだということもあるでしょうが、文句なしに楽しい一時期でした。

教育学部と法人化

とは言え、教育学部へ移籍したとたんに、いわばそのミニチュアのかたちで、教授会と助講会（教授を除く助教授以下の会）の人事権をめぐる対立を主たるモチーフとする騒動のなかに巻きこまれました。助講会の幹事長として、教授のみが握っている人事権を剥奪せんとする争いのお先棒を担がされてしまったというわけです。

しかしこれもそこそこ楽しかった。無理して言いきってしまったえば、学生の騒ぎに対してはどこか野次馬的な傍観者の目が消せませんでした。こちらは傍観者ではありえないわけです。それだけに、騒ぎが煮つまってきたときはかならずと言っていいくらいに顕在化してしまう、偽善と無知に由来する人間のあさましさに、やりきれない思いも経験させられました。

偽善とは、言葉（建て前）と身体（本音）を使い分けることです。使い分けを意識せずに実践しているとすれば、それは無知ということになるでしょう。言葉と身体を一致させた、いわば一元的生を、

拓くひとたちへ”

私たちは現在生きることができません。それが可能であるような立派な共同体は、世界中まづどこにもないからです。

しかし、であるからこそ、大学人は一元的生を、言葉と身体的一致を、目指しつづけなければならないのではないのでしょうか。大学の存在理由が知的であることにあるとするならば、身体と一致した言葉を発しつづけようとするスタンスは、大学人のとるべき絶対的な前提ではないのでしょうか。両者を平気で分裂させる厚顔無恥を忌避しつづけることのなかにしか、大衆の税金で食わせてもらっている大学が存続を許容される根拠はないのではないのでしょうか。

と、このような偽善と無知への攻撃は、現在進行中の法人化なる「改革」に対して、まやかしの言葉が横行しつつある我が山口大学の現状への不満を暗示しているつもりでした。

今後の山口大学

最近の若い同僚を見ている



晴れ着姿の教え子に囲まれて
(平成6年3月卒業式)

と、以上のような大時代がかった大学への思い入れなどどこ吹く風とばかり、要するに居心地のいい職場のひとつにすぎない、くらいにしか大学を見ていない、クールな眼に行きあたります。

それはそれなりに、偽善と無知

が蔓延しつつある大学の雰囲気と比較すれば、いっそ爽やかに見えます。そのような若者の軽い二ヒリズムが、今後さらに深化していくであろう大学の荒廃と墮落に対する防波堤になってほしい、そう祈りたいような気がします。

平成15年度定年・勸奨退職者一覧

教 育 学 部	教 授	重 岡 徹
教 育 学 部	〃	齋 藤 正 彦
教 育 学 部	〃	末 廣 正 巳
教 育 学 部	〃	河 合 洋 祐
教 育 学 部	〃	横 山 省 三
教育学部附属幼稚園	教 頭	實 松 瑞 榮
経 済 学 部	教 授	谷 光 太 郎
経 済 学 部	〃	平 野 充 好
医 学 部	教 授	森 松 光 紀
医 学 部	〃	河 合 伸 也
医 学 部	〃	米 田 純 子
医 学 部	助 手	大 洞 弓 子
大学院医学研究科	教 授	後 藤 誠 史
工 学 部	教 授	宮 本 政 英
工 学 部	〃	塩 月 善 晴
工 学 部	〃	栗 井 郁 雄
工 学 部	〃	田 畑 睦 雄
工 学 部	〃	柏 木 孝 夫
工 学 部	〃	田 淵 義 彦
医学部附属病院	技 術 専 門 職 員	倉 田 公 子
医学部附属病院	看 護 師 長	内 田 美 智 子
医学部附属病院	薬 剤 部 調 剤 主 任	足 立 タツ子
人文学部・理学部	事 務 長	柳 洋 二
経 済 学 部	事 務 長	野 澤 章 三
経 済 学 部	東 亜 経 済 研 究 室 係 長	大 庭 平 四 郎
経 済 学 部	東 亜 経 済 研 究 室 主 任	片 山 美 津 枝
経 済 学 部	東 亜 経 済 研 究 室 係 長	大 澤 晴 昌
医 学 部	学 務 課 専 門 職 員	青 木 輝 雄
医 学 部	医 事 課 専 門 職 員	萬 代 英 夫
工 学 部	専 門 職 員	伊 藤 篤 紀
農 学 部	附 属 農 場 係 長	松 永 次 郎
農 学 部	附 属 農 場 技 術 専 門 職 員	久 保 田 保
附 属 図 書 館	工 学 部 分 館 情 報 サービス 係 長	松 本 美 智 子
附 属 図 書 館	情 報 管 理 課 図 書 情 報 係	河 本 香 代 子
附 属 図 書 館	医 学 部 分 館 情 報 管 理 主 任	境 嘉 子
事 務 局	歳 入 ・ 調 達 室 長	高 林 昭 夫
事 務 局	留 学 生 課 長	松 岡 誠 也
事 務 局	企 画 室 専 門 員	末 次 敏 男
事 務 局	経 理 課 管 理 係 自 動 車 運 転 員	田 中 忠 通
事 務 局	歳 入 ・ 調 達 室 専 門 職 員	小 林 和 生
事 務 局	学 生 生 活 課 課 長 補 佐	楠 元 敏 胤
事 務 局	学 生 生 活 課 栄 養 士	森 睦 子

地について実証的な勉強を



谷光 太郎
経済学部 教授

はじめに

平成6年4月より、山口大学経済学部で10年間お世話になった。それまでは旧財閥系企業に30年勤務したか、大学院の企業経営科創設に伴い企業出身者を採用しようということでお呼びがかかった。会社時代に工場の中卒・高卒の従業員採用業務の他、全社的な大卒者の採用業務と新入社員教育にもタッチした。北は北大から南は九大まで主要大学は毎年何回も訪問し、各校の雰囲気や大学毎のカラーも相当に分かっていたつもりである。

山口大学経済学部はご存知の通り、東京高商（現一橋大）、神戸高商（現神戸大）に次ぐ全国で3番目に創立され、来年（平成17年）創立100周年を迎える名門校である。厳しい入学試験の難関を突破してきた学生の潜在能力が高い事は世間でよく知られている。私も会社時代に人事担当者として採用や新入社員教育に携ってきた体験からそれは断言できる。また、かつて私が直接仕えた複数の本学経済学部出身の上司も立派であった。頭脳の柔軟な時代に4年間を過ごすのであるから伝統とか環境が本人に大きな影響力を与えるのは当然である。各大学出身者を同

列に並ばせて行う新入社員教育を体験した私には、各大学のレベルとカラーを痛感した事が何度もあった。

学生諸君のレベルの高さと構内の美しさ

上述のように、全国の主要大学を何度となく訪れた体験からいえるのは、本学（工学部と医学部を私は不知）構内の各種樹木の多さと広さ、近接の丘陵地、さらに遠くの白雲紫山のながめの美しさは、全国大学中、五指に入るものと確信している。それに、10年間経済学部の学生諸君と接しての感想は、その知的レベルの高さであった。

数学と第二外国語の重要性

数学は科学の基本である。数学を真面目に勉強しようとする意欲のない者が経済学部に入学を希望するのは疑問である。また、物理学の基本のない者は産業の理解にも不徹底となる。物理学はともかく、経済学部の入試に数学は絶対に必要。数学の基礎知識もなく、経済学部に入っている者がいるとの声がある。本当とすればゆゆしき事だ。

旧高商系の伝統であろうが、英語の重視は悪い事ではないが、既

に中学、高校で6年間も学んでいる。私の学生時代、旧制高校以来の伝統でドイツ語が特に重要視され、2年間徹底的に鍛えられた事を今も有難く思っている。ドイツ語やフランス語を学べば、英語の特色がよく分かる。英語の理解も深まる。大学時代は第二外国語を学べる唯一といっていい機会だ。この機会を逃す手はない。

学生諸君への期待

山口高商に限らず、旧高商系の学校は商人の育成を伝統としてきた。旧帝大のように学問の^{うんのう}蘊奥を究めるために造られた所でもなく、東大法学部のように役人をつくるための学校でもない。学問をやろう、とか役人になろうか、という人は自ら別の道があろうと思う。ビジネスの世界で力を発揮しようという者が大部分であって欲しい。そうでないと教育の的が絞れない。

私は本学で出来得る限り、抽象的な事、観念論的な、あるいは理論をもてあそぶのを避け、企業時代の「現場、現物、現実、顧客」、「習うより慣れろ」「頭で覚えるより身体で覚えよう」式でやってきた。術学的な言葉や論述、あるいは空理空論と思われるようなものは極力避ける心構えできた。

イデオロギーや術学的事項は「^{ひまじん}暇人の遊び」と考え、地について実証的な勉強に励んで欲しい。



ゼミの学生と一緒に

新しき酒は新しき革袋に



平野 充好
副学長・経済学部 教授

あっという間でした！

まさか私にはまだまだこないと思っていたのですが、定年の年がもうやってきました。経済学部に商法担当講師として赴任したのが、昭和48（1973）年1月です。経済学部が平川キャンパスへ引っ越す作業の最中、亀山の旧校舎（現在県立美術館のあるところ）にある広い学部長室で、当時の学部長濱田先生から辞令を頂いたのを鮮明に覚えています。それから32年間。月並みですが、あっという間でした。いろんなことが思い起こされます。

「ヴィグート？」「・・・」

昭和53（1978）年から54年にかけて1年間のドイツ留学。私にとっては初めての海外でした。今でもドイツに着いた最初の夜を思い出します。フランクフルト空港に飛行機が遅れて到着、夜遅いものですから店を閉めようとするインフォメーションにあわてて飛び込みホテルの予約、下手なドイツ語で、「Entschuldigen Sie bitte, Können Sie mir ein gutes Hotel empfehlen?」と訊ねたのですが、ドイツ語会話をろくに勉強していなかったものですから、相手から「Wie gut?」と聞き返されたそ

の意味がわからず、おたおたしたことを覚えています。

昭和55（1980）年の経済法学科の設置、昭和62（1987）年度から数年間文部省から予算配分を受けて行った、法学部創設を展望した「山口大学における法学教育のあり方について」の調査研究、平成4（1992）年から足かけ4年間の「経済学部創設90周年募金事業活動」や平成13年度に設置された「東アジア研究科（博士課程）」創設準備も忘れられません。それにしてもこの数年、学部長4年間、副学長2年間はあまりにも貴重な経験をさせていただいた6年であり、自らの限界を知った6年でもありました。

なんといっても 学生たちに感謝！

まだ法人化準備に追われ、ゆっくりと振り返る余裕がありませんが、学生たちとの出会いがなんとも鮮烈です。赴任した頃の4時制限で、経済学部のゼミ時間はすべて第4時限からということで、午後3時から始まり4時半には終わることになっていましたが、時間通りに終わるということとはほとんどなく、いつも6、7時はあたりまえ、時には9時頃までゼミをしていることもありました。

私のゼミナールは毎年5人位から10人前後で、教室でのゼミが終わって、時にそのまま私の宿舎で食事しながら、さらに議論になったこともしば

しばでした。32年間で200人ほどのゼミ生が巣立っていきましたが、どれだけ彼らの勇気や知恵に、時代認識や時代感覚に教えられたことか。なんといっても彼らに感謝するところ大です。

「法人化」は飛躍のきっかけ

ここ数年「法人化」という妖怪に振り回されました。大学はその妖怪にきちんと対峙しえたか。むしろ妖怪と思うこちら側の問題であったことに早く気づくべきでした。大学というところは、いろいろな争点がある、研究のため、教育のため、民主的な運営が必要であるといった形で現れるばかりでなく、それらの主張が豊かな経験や確固たる信念に支えられて展開するだけに厄介です。

法人化後の大学においては、教育、研究及び運営等大学の諸活動を国民に明確に説明できることが一層重要になります。これまではあまりにもコスト意識がなさすぎました。また、自部局の利害ではなく、国民や社会の視点に立って大学のあり方、自部局のあり方を考えることも必須です。求められているのは自己変革であり、部局変革です。副学長や法人化準備委員会制度設計部会長として微力を尽くしてみたのですが、本来の非力ゆえほとんど何もしえなかったのではないかと内心忸怩たるものがあります。



創設された東アジア研究科のプレートを囲んで当時の廣中学長（柱の右）と筆者（左から2人目）

法人化後の制度作りのお手伝いをさせて頂きながら、平成16年4月1日に生まれようとする新しい「国立大学法人山口大学」を見届けることなく、「山口大学」を去るというのも変な気持ちです。私にとって法人化とは一体なんだった

ののだろうかと思ったりもします。いずれにしても新しい酒を古い革袋に入れてはなりません。法人化後わが愛する山口大学には何としても新しい酒を新しい革袋に入れて貰いたいものです。

32年間本当に多くの方々に様々なところで様々な形でお世話になりました。この紙面を借りて衷心よりお礼申し上げます。皆様のご活躍と山口大学の発展を祈りつつご挨拶とさせていただきます。

初 代 教 授



森松 光紀

医学部脳神経病態学講座 教授
(神経内科学)

とができました。

神経内科とは

当時、山口県では神経内科とは何か知られていませんでした。大学の内外の医師から「どうも心療内科らしい」と誤解され、神経症、うつ病、不登校児童などが紹介されてきました。このため、「神経内科とは（精神症状ではなく）神経症状を示す患者を診療する内科部門です」と、機会あるごとにPRしました。

神経症、うつ病などの患者さんには、「あなたの病気は精神科に専門家がおりますから、紹介しましょう」とお話ししましたが、「私を気遣いというのか」と怒って帰ってしまったこともあります。精神科も誤解されていた時代でした。

教室と研究の整備

赴任して最初の努力を機器・設備費の獲得、診察室の拡充、研究室確保に傾注しました。当時の学部長、病院長、事務部長のご尽力を得て、平成5年には神経内科学講座に移行しました。それに伴い臨床研究棟1階に教授室、医局、研究室を開設することができました。定員数5名という不完全講座でしたが、体裁は一応整い、病床も新病棟に12床認められました。

教室の発展を目指して入局者勧

誘に努めましたが、入局数は毎年2名程度でした。臨床講座では臨床研究と基礎研究を平行して進めることが必要です。基礎研究面での遅れが目立ったため、2年間の臨床研修後は大学院に進学することを勧めました。大学院生は希望に応じて、4年間好きな研究が行えるように取り計らいました。

その結果、多くの大学院生が基礎医学講座に出向したり、他大学に留学しました。基礎研究の成果が、臨床に戻って直ちに役立つことはまれですが、その思考法は臨床に新しい視点をもたらしてくれます。本学卒業生の殆どが臨床家として生涯を送ることを考えると、診療を離れ研究に専念する4年間は貴重な経験になるでしょう。

学生諸君への希望

物足りないのは学生教育でした。私自身は欧米流に学生とディスカッションしながら教育を進めて行くことを希望しましたが、教室で講義をしても一向に反応がありません。学生は黙々とノートを取るか、居眠りするか、あるいは欠席するかのいずれかで、質問が出ることはまれでした。

前の大学で講義中に学生から「先生の話は教科書の記載とは違っている」と発言され、大いに議論したことが懐かしく思い出されました。臨床講義のために患者さんをお願いして、講義室に出向いていただきましたが、学生は遠

赴 任

医学部附属病院神経内科（診療科）に初代教授として赴任したのは平成元年2月でした。以来15年間勤続していよいよ定年を迎えました。新しい教室の立ち上げには苦勞が多いのですが、教室が次第に整うのを見る喜びは大きいものです。

赴任前にいた群馬大学でも初代教授のもとで働いたので事情は心得ていましたが、新しい教室の創設に当たって大学が環境を整備してくれることはありません。最低限の準備をしたうえで、「あとは自分でやりなさい」と放任されます。赴任時の定員は教授1名のみで、1カ月後に助手1名を付けてくれました。これで、外来と病棟の診療、学生教育、研究を行わなければならないのですが、幸い精神科の神経グループが参加してくれたので、何とか仕事を始めるこ

くから眺めるばかりで近づこうと
しません。これに懲りて、以後臨
床講義は中止しました。

しかし、学士編入生が授業に参加
するようになってから、質問が増
え、全般に学習態度もよくなりました。
休暇中に診療見学に来る
学士編入生もいます。彼らは社会
体験もあり、卒業後は速やかに自
立する必要があるので積極的で
す。わが医学部も過半数を学士入
学にすべきというのが私の持論で

す。また、大学生も親がかりでは
なく、米国のように銀行からの借
金で学資を賄うようにすれば、授
業をサボったり居眠りすることも
なくなるでしょう。

法人化後、大学は大きく変貌す
るため教官と事務官は真剣です
が、学生諸君にはそれが伝わりに
くいようです。どうか学生諸君も
自己変革をめざして欲しいと思
います。



第31回日本頭痛学会総会主催後、教室
員とともに。前列左から5人目が筆者
(2003年11月、宇部全日空ホテル)

21世紀の医療を担う方々へ



米田 純子

医学部 保健学科 教授

永年携わった看護教育から退官
するに当たり、看護・看護教育変
革の視点から最近思うことを述べ
てみたいと思います。

国際化と教育

保健学科では看護・医療技術教
育・研究の国際化を目指して、「国
際誌 Nursing and Health Sci-
ences の編集・刊行」、「国際共同
研究の実施と国際シンポジウムの
開催」、「国際交流校との活動」な
ど国際化に対応できる人材の育成
に力を注いでいます。

この活動を軌道に乗せるために
元学科長友永教授、現学科長塚原
教授が大変に尽力されました。長
年にわたり積極的な国際交流をし
てきたテネシー大学マーティン校

へ私も学生と研修に参加し、また
去年はタイのチェンマイ大学とポ
ロマラジョナ看護大学にも行っ
て来ました。学生が異文化を経験
し、様々な企画に参加することによ
って、国際感覚と友情を育む貴重
な機会になっているのを見てい
ますと教育環境の重要さと責任の
重さをひしひしと感じました。

もう一つ国際化事業の一つとし
て、第1回老年看護学「国際共同
研究の実施と国際シンポジウム」
を本学で担当開催し、国内外から
の多数の参加者を得、盛会に会を
終了することができました。その
後は引き続き、国際遺伝看護学と
して「国際共同研究の実施と国際
シンポジウム」が開催されました。
交流校の研究者と本学の教官が国
際共同研究プロジェクトを立案
し、インターネットを駆使して研
究活動を遂行しその研究成果の一
部は、毎年開催される国際シンポ
ジウムにおいて報告されていま
す。これからも積極的に医療の国
際化に対応できる医療人の育成は
重要なことだと考えます。

期待される看護専門職として

(1)社会の変革としては、豊かな時

代を経た高学歴化世代の増加、
ITによる情報提供の増加、海
外での生活経験者の増加などが
あげられます。そのため、住民
のニーズは多様化し、健康面の
ニーズでも、価値観は複雑とな
り、高レベルでの生活維持が求
められ、看護にもよりよいサー
ビスの要求ともなっていると思
われます。

(2)医学・医療の変革については、
高度先進医療技術による、救
命、延命を可能としましたし、
ハイテク機器とケアへの知識、
専門化が進む一方で、高齢化、
技術革新、要求水準の向上など
により医療費増加の要因とも関
連してきました。今後、ますま
す在院日数短縮化も加速され、
これには、保険制度の変革対応
が求められる一方で、イン
フォームドコンセントのあり
方、情報開示により、患者のア
メニティー向上が求められると
考えられます。

(3)看護・看護教育の変革では、複
雑化する看護実践、看護ニーズ
の多様化、患者の権利擁護、医
学知識の飛躍的な増加、海外の
医療の知識・医療の体験者の増
加などから、看護職の役割とし
て、患者の権利としての意志決
定、倫理の問題、擁護に貢献す

ることが大事になると思います。

以上のように、近年、医療に対する国民の要求度も高まってきています。これからは質を中心に、

病院の真価が問われる時代になり、看護師に求められる内容も厳しくなると考えられます。複雑な社会的、精神的背景因子を抱えて病院を訪れる多くの人のために、医

療人として、看護の面でもより踏み込んだ援助ができるよう、これからの看護教育に期待しているところです。

山口大学の16年余り



後藤 誠史

大学院医学研究科
応用医工学系専攻 教授
(工学部機能材料工学科)

山口大学16年間のお礼

山口大学工学部に赴任して16年半、研究室の卒業生はおおよそ170名になりました。この間大過なくすごせたことは、工学部、学科、医学部の教職員の方々、また、多くの学生さんたちのご支援の賜物であったと感謝し、お礼申し上げます。

研究としては、水硬性材料の反応機構、建設材料の耐久性、廃棄物・副産物の有効利用などセメント化学を中心に、材料の多孔性の問題、環境関連問題、生体材料の開発、高温材料の開発等手掛けてきました。ここ10年若、井奥助教授、藤森助手とそれぞれ得意とすることを発展させつつ、よいスクラムが組めたと感謝しています。

草の根国際交流の思い出

この間大きな結果をもたらしたこととしては、ウクライナから研究員をお引き受けしたことと思い

ます。原発事故の直後、キエフの大学から Belitsky 氏が宇部にこられました。ちょうど宇部に被爆者支援のボランティアグループがあり、彼を通し、的確な伝手・事情の入手がなされ、医薬品の援助、被爆児らのホームステイ、等々現在の活動につながっていると伺っています。

また、韓国からの博士課程の留学生を定期的にお引き受けし、韓国の人たちとのお付き合いが大変深くなったことも大きな成果と考えています。ここ4年、かなり私的な感じではありますが、韓国および日本のいくつかの大学の大学院生を中心とした研究紹介と交流の会を行ってきました。初めての英語での発表、つたなさもありますが、一生懸命努力した後のすがすがしさがよく感じられました。そして、お互い言葉が不自由でありながらも、その親しくなる速さ、若者の特権を感じられます。楽しく交流し、互いを知る。このような交流は、これからも支援していきたいと考えています。

大学の改組への感想

資源工学科に赴任し、改組で機能材料工学科になり、さらに、大学院医学研究科応用医工学系に所属してきました。赴任してまもなく、資源工学科に慣れてきたころには、学科改組がなされ、新しい機能材料工学科の出発にも関与する事ができました。

東工大時代、身近には、どちら

を向いてもセラミックスを研究している人たちばかりでしたが、資源工学科は、地質・鉱物、鉱山土木、選鉱とセラミックス分野があり、分野としては、ミニ工学部という感じをもったことを覚えています。その後、改組により、物理系、有機材料・高分子系、触媒、地質・鉱物、セラミックス等の分野からなる機能材料工学科になり、さらに、ミニ工学部という感を強く感じたものでした。

教える側は、それぞれ専門を中心ですが、教わる学生さんは大変なものだったのではないかと思います。ようやくカリキュラムも整備され相互の関連も分かりやすくなってきたところと感じています。しかし、世の中の変化は早く、しかも激しく、もう次の改組が待っています。このような度重なる変化は、中にいる者も大変ですが、組織として諸々の蓄積がなされるのだろうかという危惧を感じます。

大学が大変な環境におかれる時代に去っていくものですが、大学の今後のご発展を期待し、祈っています。



技術者教育について思うこと



宮本 政英

工学部 機械工学科 教授

技術者の報酬

1月31日の新聞紙上の第1面は、青色発光ダイオードの発明者である中村教授に対して、特許権を譲り受けた会社が200億円という巨額の支払いを命ぜられた判決で飾られていました。中村氏曰く「この判決で子供達がサイエンスに夢を持てるようになる」「サラリーマンだっていい研究をすればイチローや松井秀喜より高い報酬を貰えることが証明できてうれしい」。

確かに、この判決は技術的な仕事に従事する人達の評価を高め、理系離れの流れに抗する効果はあると思われます。中村教授は徳島大学工学部のご出身です。さて、私は山口大学工学部機械工学科で35年間、技術者を目指す若者の教育に携わってきました。省みて、卒業していく若者を技術者の卵として立派に育てることができたであろうか、反省することが多い。第二、第三の中村教授とまではいなくても、物事に意欲的にチャレンジすることのできる若者を育てることができたであろうか。

留年対策

入学時点では狭く輪切りされた偏差値範囲の入学者だと聞きま

す。直ぐに能力の差が拡大するのか、1年生の終わりには成績の優れた人が居る一方で、なかなか単位を取れない人も少なくない。この様な差の生じる原因は様々ですが、多人数教育をするので、どうしても多様な能力、個性を持つ学生達を十把一絡げに差別なく、まとめて扱わなければなりません。

追試験を受ける学生達の多くは、試験問題のヒントに、答えまで書いてある類似問題を見せると、容易に試験問題の解答を導き出せます、しかしヒントとして問題に直接関連する基本法則等を示しても容易に答えを導き出せません。この様な学生を見ていると、解答付きの問題を読んで丸暗記することを勉強と心得ているのではないかと思われるふしさえあります。

このような学生は、「普通の授業で先生の教えることが理解できない→授業がおもしろくない→勉強する意欲がわかない→授業を聴かない→ますます理解できない」の悪循環に陥って留年を重ねると思われます。留年による反復学習が有効な学生もいますが、何らかの形で基礎的な科目については、通常の授業でついていけなくなった人の理解を助ける補講が必要なのではないかと思われます。ただ、工学部には向かず元々適性のない人もいますから、この様な人を見極めて進路を変える事を勧めることも必要です。

JABEE について

さて、工学部の各学科は、この1～2年の間にJABEE（日本技術者教育認定制度）の認定審査を受けることになっています。これ

まで研究と同様に教育も、教官の個人的な努力と責任に任されることが多かった。JABEEによれば、学科単位で一つの教育プログラム（システム）として、教育活動の成果が、世間一般から見て満足すべきレベルであることを保証し、それを証明しなければなりません。学生による授業評価など新しい教育上の試みが、最近始められていますが、JABEEの審査とこれに伴う作業などは工学部教官がこれまで経験したことのない一種の改革でもあります。

JABEEにより授業科目の教育内容について求められていることは、それほど高度なことであるとは思われませんが、多様な資質と能力を持つ学生全員にこれをクリアさせることは、前述のような留年を繰り返す学生がいると大変のような気がします。

JABEEでは補講や留年を禁止しているわけではありませんが、現在の各教官は、JABEE審査の準備のみに限らずその他、独立行政法人化にからむ事等、最近特に増えた書類の提出等に忙殺されて、これ以上教育活動に振り向ける時間的余裕を持てません。定年間際の私でさえ、催促をされているのに未だに35年間たまった図書等の整理や返却さえままならず、本文を書くことなど、他の多くの仕事に追われています。

しかし、卒業できない学生を増やさない対策は必要な気がします。これからますます大学教官の仕事は増えると思われます、仕事に優先順位を付けること、そしていかにうまく手を抜くか、又はお断りするかを考えることが必要ではないでしょうか。

終わりに、皆様方のご健康と、山口大学のますますのご発展をお祈り申し上げます。

哲学も研究の役に立つ事がある



栗井 郁雄

工学部 電気電子工学科 教授

今回の退職にあたり執筆と挨拶の機会が夫々3回及び6回与えられる事を知りましたので、その全ての機会を有効に使って私からのメッセージをお伝えしようと計画致しました。退屈かも知れませんが14年間の山口大学での研究の中から私にとって最もエキサイティングであったものについてお話ししたいと思います。以下は約2年前に電子情報通信学会誌に掲載された「内部構造を持ったマイクロ波共振器」という論文の前がきを私なりにわかり易く書き直したものです。

マイクロ波共振器

携帯電話や、電子レンジ、ナビゲーションシステムにマイクロ波が使われている事は御存知でしょう。数多くの信号の中から自分に必要なチャンネルだけを取り出すためにフィルターというデバイスが不可欠ですが、フィルターは共振器を数多く並べて作ります。従って特性の良い共振器を実現する事はマイクロ波通信において重要な技術課題です。

要素と構造

共振器は使用する材料（要素）とその構造によって特性が決まり

ます。これは共振器に限らずあらゆる回路素子に共通する事実であり、広くは「あらゆる実在はその内容と形式（要素と構造）によって存在形態が決められる」という命題の一例にすぎないと言えるでしょう。

構造とは要素間の相互作用、関係を決める概念であり、共振器で構造を決めれば電磁気学的な境界条件が決まります。それによって共振器の最も重要な属性である共振モード（共振の仕方又は電磁界分布）が決定されると共にそれに特有の共振周波数が決まります。（数学的には固有関数と固有値が決まると言います）。つまり共振の仕方と共振周波数は1対1に対応しているわけです。

そこで、ある周波数で共振している共振器にそのモードの電磁界分布を乱さないように切れ目を入れる事ができたとすれば、共振周波数は変わらないでしょう。しかし他のモードに付随する共振周波数は変わるのでうまく切断する事によって不要モードの周波数を遠ざける事が可能となります。この結果優れた特性を持った共振器が実現されます。

構造の階層性

上に述べた「構造」は実は2段階になっています。つまり共振器の「外形」という「外部構造」がまずあって、その分割によって「内部構造」が新たにできています。も

しフラクタルのように何段にもなった構造が共振器で実現できれば更に新しい特性を実現できるかもしれません。物性論のトピックスであるメゾスコピック構造もこの階層性の一部を形成していると言えるでしょう。

分割と集積

「分割」があればその逆の過程である「集積」も可能でしょう。これは一世紀も前から人工媒質という概念の下に検討が重ねられています。最近は新しい表現で「メタ物質」とよばれ人気を呼んでいます。様々な微小な粒子を集めると、マクロに見たとき粒子の材料と形状や並べ方によって異なった電磁気的特性が発現します。我々はそのような人工媒質をマイクロ波共振器用に設計し開発しています。

分割と集積という対立する過程を用いて内部構造を導入し一つのデバイスである共振器を構成する方法は弁証法的であると言えます。私の青年時代に学んだ哲学が自分の研究にある程度役に立ったのは嬉しい事です。この手法は共振器に限らず他の様々なデバイスにも適用可能であると思いますので新しい職場においても生かしていきたいと考えています。



今年研究室の学生と一緒にいったスキー旅行のスナップ

Quality of life を目標とした感性工学への期待



田淵 義彦

工学部 感性デザイン工学科
教授

大学勤務への感謝

この度、無事本学を退官させて頂くことになりました。

「感性デザイン工学科」と言う、非常に時代を先取りした素晴らしい学科に、4年前に新たに博士前期課程が設置されるということでお招

きを頂き、予ねてから大学は研究の府であると思っており、大学の研究者に非常な憧れも懐いていましたから大変な名誉と、喜びもひとしおで、会社勤務を後少し残して本学に勤務させて頂きました。

所属はヒューマンインタフェース学講座の照明・映像表現学研究室で、照明工学、色彩工学、産業倫理、感性工学実習のマネージャなどを担当しました。もとより4年間は非常に短いので少しでも無駄にしないようにと、当初より人様よりは高密度に働こうと決心して、かなり焦った計画も懐いていましたが、あっという間に退官となり、やはり志した事柄の半分も達成できず、誠に心残りで残念と言う他はありません。

しかし本学でお世話になったお陰で、研究者としての仕上げの期間を頂き、さらに本学に勤務していなければ遭遇できなかった思いがけない非常な僥倖にも恵まれ、思いがけない成果を上げられた事柄も多く、感謝の念で一杯です。

研究者としての志

1963年に電気工学科を卒業しました。当時は、現在のように環境に対する意識は今日ほど強くはなく、研究に従事する希望者も多くはなく、学部・学科が競って設置されるという状態ではありませんでしたが、潜在的に心の底から、人の心理を研究して快適性からみて環境システムを構成するような仕事が無いものかと強く願っていたところ、照明工学の講義に出会い先生方のご理解とご支援を得て、以後殆どこの道一筋に従事して来ました。

会社では、主として屋内照明環境の快適性の研究に従事して、これより新しい照明器具の照明特性を

企画し、さらに学会レベルでの照明ガイドを定め、照明技術の普及を図る業務に従事して来ました。オフィス照明では、インテリジェントビルにおける快適照明環境に関する研究により、ビジュアルディスプレイに映りこみを生じない照明器具の光学的所要条件の明確化と照明器具の照明性能の決定や、店舗照明では、店舗空間の快適照明(VMD=ビジュアルマーチャンダイジング)の研究により、VMDの理論的体系化などを行いました。

本学での思い出

照明学会に所属していますが、思いがけなく全くの僥倖で、2001年5月から2年間、学会副会長を仰せつかりました。副会長は企業所属者の場合は、会社役員クラス、大学ならば著名大学教授というのが従来の慣わしでしたから、大変名誉なことと受け止めて勤めさせて頂きました。図らずも2001年9月に照明学会の全国大会が本学で開催され、本学関係者に非常にお世話になりました。

さらにその後、これも全くの幸運で「照明ハンドブック」改訂版出版の件が持ち上がり、2003年中は、編纂委員会幹事および編主任(10編中2編)として執筆選任と依頼や閲読、および「照明計画」を中心に約50ページの執筆に追われ、大変に忙しい思いをしました。お陰様で非常に評判もよく、発行後直ちに中国語の訳本が出版される申し入れがありましたから、わが国のこの分野の研究が非常に進んでいることの証左ともなり、かつ本学に留学されている方々に非常なご参考になるものと慶んで居ります。

研究は、「Quality of life」すなわち生活の質を高めることを上位目標にして、特に安全性と快適性を念頭に置き、主として光環境の快適性の研究や、白色LEDの照明環境応用に関する基礎的研究などに従事しましたが、大体所期の結果は得られましたが、本格的な対外発表と産業界での実現には至らず、全く残念と言う他はありません。

感性工学への期待

今世紀は、Quality of life を目標にする時代と言われています。生活必需品が普及して、欲しいものが見つからない時代において、真にわが国の工業の復権と経済再建のためには、苦勞しても自前で新し

い文化、住まい方、暮らし方を創出することが必須と考えられます。そのための方策の一つとして、快適性の研究に基づいて環境や役務の具備条件を明らかにして、これらを実現するための人真似でない新規商品を創出することが必要であり、HOWを卒業してWHATの発見により、工学の発展策と活性化の先駆となることが、発展の幹線ルートであると言うのがわたくしの信念です。

人が使用した際のシステムの総合効果からみて、

必要なハードと、役務(サービス)特にオペレーション(システムの使い方や組織の運営の仕方)を研究して、望ましい感性予想図を創出して顕現化し、実現手段の開発を促進する工学が重要と考えています。このために、感性工学は非常に有効な手立ての一つとして、非常に期待をしております。

特徴ある感性デザイン工学科を大きく育て、斯界で大きな成果を上げられることと、惹いては本学の一層のご発展を心より願って止みません。



防府天満宮の梅林

私の軌跡



柳 洋二

人文学部・理学部 事務長

私自身、定年を迎えることは理解できているが、山口大学広報活動専門委員会より執筆依頼の文書をいただいても実感が沸いてこないというのが正直なところだ。

野球馬鹿

次男でありながら父親の面倒を見なければならないことから、転勤の少ない官署は山口大学という事で、昭和39年6月就職いたしました。当時の山口大学は県立医科大学の国立移管が始まった年で、定員削減もない時で多くの職員が採用されました。

最初は庶務課で2ヵ月、その後教育学部（今の山口市役所で建物）は当時のままの補導係配属されました。当時私は野球大好き人間で、すぐに職員野球部に入らせていただきました。毎週市内の野球

大会が開催されていて、明けても暮れても野球で、終われば祝賀会か反省会、流れて湯田の町か防府の町へ車を飛ばしよく遊んだものです。

今ひとつの思い出は、当時中国地区国立五大学持ち回りで、野球、バレー、テニス、卓球の大会が夏休みに開催されていて、大会の一週間前から合宿があり、朝から野球の練習でした。今から思えばこの時に諸先輩に私自身を知っていただいたことが、後に仕事の上で大いに役立ったと思っています。

造る楽しさ

昭和50年4月創設2年目の徳山工業高等専門学校に転任しました。上司は事務長のみで職員も少数で非常に家族的な職場でしたが、ゼロからの出発で規則を作り上げることや、実習工場の技官探し等々、結構忙しい毎日でした。

特に技官の方々については、下松市内の日立製作所笠戸工場に全面的にお世話になることになり、30歳そこそこの若輩者が大企業の総務部長さんとお話をすることが度々あり、企業の考え方、話術等々非常に勉強になりました。再び山口大学にお世話になることに

なり、初の職員運動会のお世話、合宿研修を取り入れたこと、委任経理金での非常勤職員の雇用の制度化等々楽しく仕事をさせていただきました。

評価

補佐時代のことになりますが、毎年の定期異動の時期ほど嫌な時期はなかったと思っています。K局長から胃が痛くなるのが早いとよく言われましたが、配置換・昇任について、ある人の評価をしなければならぬ時程悩んだことはありませんでした。私はこまめに学内を歩き回りいろんな方のご意見を聞き人事案を作らせていただきましたが、皆様方の私への評価は芳しいものではなかったのだと思っています。

偏った知識

最後のポストにおいては、庶務系人間で会計関連業務未経験者としての知識の偏りに困り果てたことにつきます。若い時に異なった仕事の経験の必要性を強く感じています。

最後になりましたが、これまでお世話になりました上司、先輩及び同僚の皆様方に心から感謝申し上げますとともに、国立大学法人山口大学の益々のご発展を祈念いたします。

時代の変転・思い出



野澤 章三
経済学部 事務長

光陰矢の如し

私は、昭和38年3月に山口大学に採用になり、市内後河原の文理学部会計係に配置されて、大学職員一歩を踏み出した。初日から始まった先輩からの指導は規則を読むことであり、これが今日の私の発想の礎になったと思っています。

その後の40年間はつい先日のことのようですが、いくつかの思い出として、昭和39年度から始まった県立医科大学の国立移管に伴う物品受入事務で、頻繁に医学部（医科大学）に行き現物確認や帳簿整理をしたこと、鴻南寮に避難して給与係の仕事をしたこと、昭和45年の大学紛争時に当時の文理学部が封鎖され、時の学部長を抱えながら避難したことなどが想起されます。

仕事面では、新規課題を探して取り組む事を楽しむ癖から、給与振込化を進言、これを昭和59年2月から実施できたことも思い出されます。当時、団体から誰の命令かと詰問されましたが、実際は上からの命令ではなく現金取扱い面や時代の趨勢として説得をしたものであり、上層部は振込システムの確実な実施に不安を示しましたが、1カ月近く要して、ようやく

トップに届き決裁されたものです。

また、本省が三本官事務の電算化を示唆していたことから、物品管理事務の電算化を提言したり、予算執行事務の電算化導入を進言し、当時の情報処理係長とシステムづくりを推進したこと（のちに改修）、現在事務用電子メールは必須アイテムですが、これは医学部教授会でその導入を促されたのを契機に、学務課当時システム構築及び導入企画書を作成し、平成8年7月に学務課の会議開催通知を実施したのが本学でのシステムの事務用電子メールの先駆けであったと覚えております。

平成10年4月には（11年5月まで）山口大学創立50周年記念事業担当の命令を受けた時は思わずドキッとしましたが、50年に一度のイベント、私の企画精神を活かすチャンスと喜んで取り組みました。準備後半には若い優れた担当者を配置していただき、また周囲の方々の助力により、お陰様で各種事業をトラブル無く完了することができた次第です。

3月31日で国立大学制度に幕があり、4月1日から国立大学法人への移行、そして教職員の国家公務員身分から法人職員への切り替わり、自分がこのときに定年退職することを、40年間高等教育機関で働いた様々な出来事と共に一つの大きな巡り合わせのように感じています。そして時代の変遷とそのスピードをかみしめています。

山口大学への期待・応援

4月から法人として大学運営が始まりますが、ややもすれば大学

という枠の中に終始しがちなこれまでの思考過程から脱却し、大学の志向が見える目標・計画に則って設計し機能を発揮することが重要であります。そのためには、山口大学として強い動機と独自性をもって臨み特色ある教育研究成果を顕し、且つそれを社会によく見えるよう発信することが条件と思います。

その原動力は大学人です。教職員全員が教育機関としての入り口から出口まで、情熱を掲げて教育研究活動に心を注げば、学生は自ずと山口大学に集い社会における本学の存在価値が高まります。山口大学の、いわば魅力の創造でもあり、その根源は本学と学生への愛情に他なりません。そのためには、大学には特有の組織形態がありますが、全教職員が融合して、積極的に管理・運営、教育の在り方、学生の生活面等々を担うことを念頭にすべきと思います。

最後に、本学に東アジアをエリアとした教育、経済、産業、観光、運輸、文化歴史、留学生関係等の分野にかかるセンターを構築し、一つの建物に集中して我が国屈指の「東アジア研究、教育・情報総合センター」を設置されることを最大の願望としています。今既に各学部で活発に芽生えており、次の段階は総合力として踏み出すことに成否がかかっているところでです。＜好機逸すべからず。＞

雑感

定年退職を迎える身となりましたが、まだ勤労意欲十分のつもりであり、何か社会のために尽力できるといながらも、能力不足と退職による社会からの疎外感は、若干の悲哀として残ります。自身のゆったりとした時間を確保し趣味等に興じるのも、人生節目の選

択かも。

この節目の折りに意識するのは、人はいつも支え合っているということ、即ち人への感謝の念です。そして誰かの言葉を引用すれば、「人生己以外皆我師」であり、この思いが年齢と共に日々増す気がします。

末筆になりましたが、本学の一人ひとりが元気で活躍され、一

丸となって益々活発な教育研究活動を展開し、山口大学が世界を舞台にいま芽生えている国際力を発揮し発展していくことを切に祈念いたします。山口大学が情熱と夢を膨らませていくことを、心から楽しみにしています。

皆様大変お世話になりました。
厚くお礼申し上げます。



記念事業を担当した創立50周年式典会場で
(平成11年4月23日 筆者：右端)

幽

閉



大庭平四郎

経済学部 東亜経済研究室係係長

国家公務員としての長い歳月が終わりに近づいた。

私には他の事務職員と極端に異なることが一点ある。それは、通常3～5年で行われる人事異動が、採用された年の6月(18歳)にあった後、40年以上にわたってなかったことだ。一部では「わがままを言って動かなかった」とささやかれているらしい。しかし、それは正しくない。異動の希望は何度も提出している。では、大学側が異動に際して好んで用いる言葉「適材適所」「能力を見て」という判断がそうさせたのだろうか。そうであれば私以外にも同様の職員が存在するはずである。廣中学長は職員が能力を発揮するためには「場を与えることが必要」と発言された。私にはその機会が与えられず、能力を見定めることも行われ

なかったということになる。「能力がないから放置される」のかと、いじけた気分になることもしばしばであった。

50代後半になってから、こうしたことをいろいろと考えるようになった。大学側の理由は問わないことにして、たどり着いた「結論」を紹介する。

「何故40年も？」という問に対する解答は「幽閉」であった。では、どんな罪を犯したのか、野山獄に幽閉された吉田松陰のように密出国を企てた覚えもないし、その他に思い当たるような犯罪行為も思い浮かばない。ようやくたどり着いた罪名は「性善説立脚罪」と「寡黙罪」であった。これは「自己弁護」のための口実でもあるが、本稿では割愛する。

幽閉場所

40年以上にわたって配属された経済学部東亜経済研究室係。いわゆる庶務・会計・学生系とは異なる業務を行い、場所も他の事務室とは離れている。牢獄は10万冊を収蔵している書庫、築30年だが、蔵書はほぼ100年前から蓄積されており、戦前期アジア関係資料の豊富さが目を引く。何度かマスコミにも紹介された由緒あるコ

レクションである。出入り口は鉄製の重い扉、面積は広いが夏は暖房、冬は冷房完備、とても一日中なかにいることはできない。

面会人はそれなりに多く、学内外とも囚人扱いではなく、親しくまた役務への期待も込めて接してくれる。学外面会人の多くは、牢獄備え付けの蔵書に感嘆の声を発する。後日感謝の手紙や刊行物を寄贈することもしばしばある。囚われの身であっても喜びを感じる出来事はある。

「配置転換三原則」が形骸化され、希望の有無に関係なく異動させられるケースも見られる中で、希望しても異動が40年も行われなかったことはどう考えても異例である。「幽閉」という表現がピッタリだと思っている。囚え、閉じこめるのであるから、それなりの理由を設け、罪状認定を行い刑期以外の罰則も付加されたと考えられるが、すでに獄中に身を置いていたためかその内容は伝えられなかった。「役務」の性格から、5年の刑期では短いと思うが終身刑は長すぎる。

「幽閉」で得たもの

一ヶ所に長期にいたことで得たものも多い。蔵書との関わりでは、多くの書物の背中(＝書名)を覚えたことで利用者にある程度迅速に対応でき、レファレンスに

も応じることができた。また、図書館や近・現代史とりわけ旧植民地に係わる興味を深め関係する書物を読む機会が増えた。さらには、蔵書や業務を仲介にして他大学の研究者や研究所等に多くの知人を得ることができ、山口大学や東亜経済研究所の紹介にも寄与できた。山口大学の変化を40年余にわたって「定点観測」することもできた・・・枚挙にいとまがない。「幽閉」で得た貴重な財産である。

ともあれ、長い「幽閉」から解放され、娑婆にでる日まで残り僅か。公務員・大学職員としての生

活を振り返るとき、三つのことをベースにおきたい。「憲法を遵守」したか「国民の公僕」であったか、「国民のための大学づくり」をめざしたかである。この三点については日常的に留意して業務に携わったつもりであり、少し控えめではあるが「私を褒めてあげたい」という言葉をはなむけとして贈りたい。

日本が「戦争をする国」に急激に近づきつつあると多くの国民が危惧している。歩調を合わせるように国の根幹に関わる憲法や教育「改革」も喧伝されてきた。こんな時代だからこそ、平和を願う国民の大学への期待も一層強まってい

る（と信じたい）。山口大学が、期待を真正面から受けとめて国民の負託に応えつつ、社会と人類の未来に希望をもたらす大学としてますます充実・発展することを、国民の一人として期待している。

お世話になりました。



前穂高岳にて（右から二人目）

定年退職に悔い無し

萬代 英夫

医学部 医事課専門職員

退職を前にして

退職2年3カ月を前にしてがんのため入院しました。転移がみとめられすぐに抗がん剤投与、放射線ライナック治療、そして非常に大きな手術、約7カ月の過酷な闘病生活の後仕事に復帰しました。

心配な転移は主治医からは最低でも5年間は特に注意が必要で内3年間は厳重注意といわれ、また長い闘病生活による体力低下、身体ケア、精神の脆弱化・不安等に悩まされ、私なりに体力増強、気分転換に努力をしましたが残り1年8カ月の職場生活が非常に長く感じられました。私の半生を費やした大学勤務43年間でこんな気持ちで締めくくられようとは思いませんでした。

多様な仕事内容

私が山口大学に採用されて、最

初に配属されたのは農学部補導係でした。当時農学部は下関市長府にあり、他部局と地理的に離れて社会での最初の職場でもあることから、今も長府の町並みと共に額縁の中の風景のように焼きついています。

建物は以前進駐軍が使用（私の記憶違いかもしれませんが、）していたものだ聞いていましたが、そのためか、なんとなくこれまで見たり使用したりしてきたものとはどこことなく違っていったような気がします。建物前には路面電車が走り、道路の向こう側にはまだ使用されていない埋め立て地があり、前には海が広がり、会計係のある室は夏には開け放たれた窓から勢いよく海風が入ってきました。職員の球技大会等運動はこの埋立地でよく行われていました。

厚狭から通勤していた私は、電車の時刻や接続の都合により7時前には事務室に着き、机拭き・清掃・整頓をした後時間までよく仮

眠をとりました。補導係は私を含めて三人で、私の主な仕事は掲示貼り、謄写版刷り、コピー、電話連絡等雑用務から始まりました。当時長府に勤務していた事務職員で現在も本学に在職されている方は私の他には二人だけと記憶しています。

昭和54年医療技術短期大学部創設準備室が設置され、室長、事務長と3名での設置準備を行いました。目的ははっきりしていましたが、準備しなければならないこと、わからないことばかりで資料もなく困惑の連続で毎日22・23時と帰宅が遅くなる日が続いて、また設置されてからは会計事務を担当して、その構造からうなぎの寝床といわれた旧学生寮の改修等開設間もない建物や設備品等の整備に携わりました。教官と事務官との関係も垣根の低い極めて親密な雰囲気が漂っていたように記憶しています。

教育学部附属養護学校での事務は、通常の事務の他に教師のみならず児童・生徒及び父兄との交流も多くあり、授業や行事などから

常に季節感を感じながら仕事ができる家庭的な幸福感がありました。これ以後、庶務、会計事務を束ねた総務係の担当が続くことになります。工業短期大学部での同学部の「発展的解消」に関する事務、また学生部のときは戦後の大きな改革の一つとなった大学設置基準等関係規則の改正事務に携わり、猛然と勉強しましたがなかなか理解できず困ったこともありました。

このほかいろいろな担当係を経験しましたが、私の仕事は会計関係を中心とした総務・学務関係と幅広い仕事に携わり苦労もありま

したが、半面変化があり非常に面白かったと思っています。

趣味として

私が山登りの洗礼を受けたのは常盤キャンパスの時で、当時登山を行う職員も多く最初の山は石鎚山でしたがバテバテでついていくのもままならない状態でした。それでもこれを境に山にとりつかれ、職員の方々と次々に山行を楽しむようになり多くの山仲間との出会いがありました。定年後も健康でさえあれば一生登山歩きを楽しむつもりです。

再び退職を前にして

それでも、今、神に生かされていて良かったと心から感謝しています。定年退職とは車窓から眺める景色のようにさりげなくやって来て去って行くものなんだな～と、改めて思っています。山口大学との半生はとても楽しかったと、今晴れ晴れとした気持ちです。国立大学法人化が目前に迫りましたが、地域の活き活きとしたきらきら輝く一粒の大学として益々発展できますよう祈念して筆を置きます。

時の変わりゆくままに



伊藤 篤紀
工学部 専門職員

あつという間の歲月

山口大学に奉職して40有余年、顧みればあつという間に歲月が過ぎ去ったというのが実感で、まさに「光陰、矢の如し」の心境です。

仕事の思い出－会計畑で

今日までの公務員在職期間中、一環して（定年前、約4年の学生畑：就職担当業務を除き。）国立大学特別会計法とともに大学会計畑を歩んで来ました。この間、いくつかの部局を経験させて頂きましたが、特に通算勤続年数が最も長い医学部・附属病院では、新外

来棟竣工時の物品調達などの現場の責任者（用度係長）として限られた日程での入札業務等の準備で、毎度、毎度、午前様の日々もありましたし、管理課総務係では、全国的な傾向となった医学部附属病院における医療費不足で、当時の上司とともに病院内の各医局を日参し、節約を呼びかけたことも今は走馬燈のように頭の中を駆けめぐっています。

また、農学部では、学部改組と大学院（農学研究科・連合獣医学研究科）の設置要求の際の概算要求事務に多少なりとも携われたことが、懐かしい思い出として残っています。いずれも有能なスタッフに助けられてつつがなく済んだものと心から感謝しております。思い出を語ればきりがありませんが、それぞれの職場でいろいろな方々と仕事をさせていただき、その方々との繋がりが財産となっています。

仕事の思い出－学生畑で

定年前の4年間、初めて学生関係の業務に携わらせていただきました。

発令は「就職指導担当専門職員」でしたが、併せてインターンシップ関連業務を担当致しました。インターンシップは学生が在学中に企業等において自らの専攻や、将来のキャリアに関連した就業体験を行うことで、文科省は教育の一環として位置づけており、近年急速に普及しつつあります。

当初はこの制度が始まって間もない頃でしたので、公募しても、学生は「笛ふけど、踊らず」の感があり、学科の先生方に学生への奨励をしつこくお願いしたものです。その後は参加学生も徐々には増えてきました。インターンシップは現場で就業体験することによって、高い職業意識や将来を見据えた学習意欲の向上、併せて組織の中での人との付き合い方など大いに学ぶべきものがあり、これからの積極的な参加を促してほしいものです。

これからの国立大学法人 山口大学に期待

いよいよ4月から国立大学法人化が施行されます。

各大学が中期目標に沿って中期計画を定め、その達成状況を第三者が評価し、予算を配分する。まさに国立大学に競争的原理が導入されます。先日、日本経済新聞に全国理工系大学の特許出願数や論文数・産学連携等貢献度などから、国公立の大学間評価が発表され、我が山口大学は総合評価で旧帝大や有名私大に混じって堂々の13位にランクされたうれしいニュースが載っていました。

これは本学関係教官等の日頃の

努力や改革意欲等が正当に評価されたもので敬意を表しますが、これから各大学もそれぞれの個性を発揮すべく、ますます競争に拍車がかかって来ることでしょう。これらに対応するためには学長のリーダーシップのもとに教職員が一体となって、自ら考え、自ら行動し、自らの責任で大学運営を行っていくことがこれからは求められることになります。教職員の方々には健康に留意され、それぞれが高いモチベーションを図って行かれることを期待します。

最後に

法人化を目前に控え、様々な難題に取り組まれている教職員の皆

さんのご健康と、在職中にお世話になりました上司、先輩、同僚、後輩の方々に心から感謝申し上げ、国立大学法人山口大学がますます発展することを祈念致します。



「ゴルフ仲間と」（後列右から2人目）

Get the V・S・O・P！



松岡 誠也
学務部 留学生課長

人との出会い

今から遡ること36年前、熊本の片田舎から九州大学に奉職いたしました。言葉も熊本弁丸出しの風采もご覧のと通りの有様で、正に「田舎っぺ大将」そのものでした。でも、九州大学農学部教職員の方々はこのような「田舎っぺ」の私を温かく迎え入れてくれました。人が人生を幸せに過ごせるかどうかは、その最初の「人との出会い」にかかっているかと思いません。私の場合は、その最初の「人

との出会い」で本当に素晴らしい方々に巡り会うことができて幸せです。

その後、部局を移り、更には他大学などを転々として、縁あって一昨年の4月から山口大学にお世話になっております。今日に至るまで、至る所で素敵な方々と出会うことができました。今日、私が無事に公務員生活を終えることができるのも、このような素晴らしい人々との邂逅があったからこそと心から感謝を申し上げる次第です。

異文化体験

山口大学は韓国の公州大学校と短期学生交流を実施しております。平成14年度の短期学生交流で、人文学部の和田 学先生と私とが本学学生を引率して公州大学校へ行くことになりました。これは私にとっては生まれて初めての海外渡航でした。私は韓国語がで

きるわけでもなく、この渡航期間中は和田先生にお世話になりっぱなし。これもまた、素晴らしい和田先生との出会いです。

中世に山口で栄えた大内氏が百済の王族の末裔と称していた関係からでしょうか？百済の古都である公州市は山口市の姉妹都市となっています。公州市に行ってみますと、周りを緑の山々に囲まれ、その風景たるや、日本の原風景そのもので山口市にそっくりの感でした。なるほど姉妹都市とはこういうものなののでしょうか？

公州大学校では先生や学生と交流を図り、更には、ホームステイで直に韓国の方と接する機会に恵まれました。また、韓国内の歴史探訪などもさせていただいて異文化理解に努めました。

この体験を通して私に言えることは、「異文化体験」は必要だということです。本学学生は自ら積極的に海外に出かけて異文化理解に努めていただきたいと望んでやみません。

V・S・O・P

皆さんの中にはブランデーのラベルにV・S・O・Pと言う文字を眼にした方は多いと思います。でも、私が申し上げるV・S・O・Pは決してブランデーのことではありません。私が願望を込めて言うV・S・O・Pは次のものののです。

Vitality

人は何と言っても気力、活力が必要である。身体でぶつかって欲しい。

Speciality

専門性を持って欲しい。専門性

は一人ひとりの生き甲斐につながる。

Originality

人間が考えることをなくしたら生きることを失ったも同然。人まねだけでなく、自分の独創性を持って欲しい。

Personality

職場や社会の中でも個性が輝く頼りにされる人になって欲しい。

山口大学はこの4月から法人化されます。この法人化を前に、私は公務員生活を終えますが、山口大学の教職員並びに学生の皆さん

がそれぞれにV・S・O・Pを身に付けば、法人化を迎えても山口大学は大丈夫！

Get the V・S・O・P！



日韓学生交流で訪れた宣化堂（公州市）で民俗芸能を学ぶ

青春の職場に感謝



森 睦子

学務部 学生生活課管理栄養士

学寮

校庭の草木から生まれる四季折々の風景を楽しみながら学寮の栄養士として無事に働くことが出来ましたことを大変うれしく誇りに思っています。いつも若い人に囲まれフレッシュな感覚で仕事が出来ました。ありがとうございました。

私の就職した昭和49年ごろと言えば、皆さんも浅間山荘事件等が記憶にあると思いますが、学生運動にピリピリする時代で、榎野寮（女子）の食堂でも赤や白のヘルメットを被り、目だけ出して顔をタオルで覆った学生が激しい口

調で派閥論争を繰り返していました。食堂は楽しく食事をするところなのにと気を揉んだことを覚えています。この様に元気の良い寮生ですから毎年秋に行われる寮祭は前夜祭の会食会から始まり討論会、学生、地区の人を招いてのバザー、個室開放、ゴーゴーダンパ、映画会等々今では考えられないロングランの4日間、多くの行事が企画され全寮生とともに楽しんだ懐かしい時代です。

食事作りの中に目指したもの

新寮生を迎えると毎年のように起きるハプニング、「〇〇さんが泣いている」「〇〇さんが部屋から出ない」など耳に入ってきます。部屋を訪ねると目を泣きはらして、昼間なのに布団にもぐりこんでいます。いろいろ話してると「お母さんのシチューが食べたい」「家の肉じゃがは……」などまさにホームシック。それで、リクエスト料理をさりげなく持参、数回部屋を訪れるとだんだん顔色は明るくなり、寮の中に友達も出来て元

気になります。私はその子の代役お母さんになれたことをチョッピリうれしく思う瞬間です。

退寮が近づく3月、食堂においてある「お気付帳」にいろいろなメッセージを残していきます。「〇〇料理が美味しかったので真似て自炊で作ります」「寮食を食べていると体調が良かった」「安い寮食があったから学費が少なかった」「風邪の時お粥ありがとう、うれしかった」など思いつくままに書かれています。ノートも今は7冊目、私にとってはなによりの「宝物帳」です。

5年前から吉田寮（男子）も兼務となりました。寮食は朝昼夕の3食、男子、女子は栄養所要量、嗜好が違うので寮ごとに献立作成、献立作りは日々頭を悩ませました。食品本来の味を大切に季節に出回る旬の品々、極力添加物を避け、若者に好まれる油っこい料理からも必要以上に油脂は摂取させないなど心がけましたが寮生にはファーストフード的食事が好まれ苦労しました。

今、若年から生活習慣病が問題になっていますが、適正な食生活

を行えば防ぐことが出来ると思います。食べるための食生活からより良く生きるための食生活を生きた教材として寮食の食事作りをしました。調理員さんには大変忙しい給食であったにもかかわらず支援、協力いただき、美味しく作っていただいたことを感謝いたします。

寮食を利用した学生のこれからの長い食生活に効果は如何ほどであろうか？ 多少なりとも役立つ事を願ってやみません。

「食育」の相乗効果

体育系サークルから食生活についての講演依頼がありました。スポーツをしている者がまともに食事をしていない、食べたいとき食べたい物を飲み食いするだけの現状、これではスポーツをする気力も出ず、サークル活動の向上は望

めない。常日頃の3度の食事の食べ方、手段を分かり易く理解させる事が依頼の目的でした

私の調理経験から生まれた方法を学生のやる気一つあれば出来る超簡単食事作りなど話していくと、聞いているほうも身乗り出して次々に質問が飛び出す有様です。この現状から学生は食に関する知識は十分にあるが、食事作りのチョットした工夫「知恵」がないため食生活がうまく行かないと思えます。

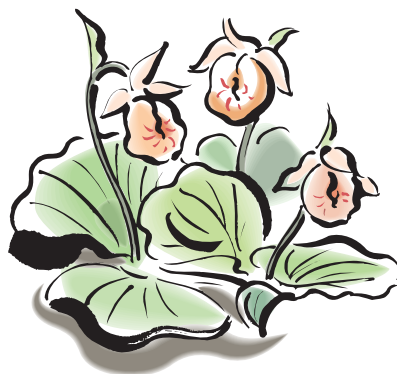
食が乱れると社会が乱れるといわれますが、現在、食の危機です。教育改革の一端に「食と健康作りの実施」が加えられることを願っております。立派な学問、研究に取り組む力は、毎日の充実した食生活から生まれてくると思えます。山口大学の今後一層のご発展をお祈り申し上げます。



「寮食を食べていると体調がよかった」と喜ばれ、笑顔がいっぱい（左から2人目・榎野寮）



添加物を避け、栄養たっぷりの食事（吉田寮）



TOPICS

就職支援行事

山口大学業界・企業研究会開催

平尾 元彦 学生支援センター 助教授

後期試験が終わり学生たちは春休みへと突入するこの季節、3年生・修士1年生にとっては就職活動へ動き出す季節でもあります。2月10日あたりから吉田キャンパス・共通教育講義棟付近にスーツ姿の若者たちが突如出現しはじめ、驚いた方も多かったのではないのでしょうか。平成15年度山口大学業界・企業研究会（学内業界・企業研究会）の開催です。

これは学内に企業・団体の方々をお招きして情報提供していただくもので、本年度で4回目、この時期の恒例行事となりました。今年は、午前1コマ、午後2コマの時間帯に3教室を活用して3社並行で開催することとして、1日9社、2月27日までの9開催日にて合計81コマを準備しました。12月から参加企業の募集を開始しましたが、例年以上に問い合わせも多く、81社すべての日程が決まって開催初日を迎えることができました。

真剣な表情の学生たち

この原稿は2月14日に書いています。以下は、10日・12日・13日の3日間の日程が終わった中間報告です。この3日間で27社による研究会を開催しました。参加学生延べ数は約800人。一教室平均30名ほどです。教室の一番前から席は埋まり、説明に熱心にメモをとる学生たちは皆真剣な表情。活発に手をあげて質問する姿は、なかなか堂々としたものです。終了後に企業の方と個別に話しこむ学生も多く、積極的な姿がそこにはありました。

参加した学生からは「まだ自分のやりたい仕事が見つからないので、この機会にいろいろな会社の方の話をききたい」「交通費がかからないのでとっても助かります」「提案営業の仕事って楽しそう」「会社の方のプレゼンが素敵」「カッコイイ！あんな風にバリバリ働きたい」などの声も聞かれ、それぞれに得たものは大きかったようです。本日現在での参加予約学生延べ数は約2,200人。これから2月27日までの6開催日、企



会場横の案内掲示

業の方と直接話ができるチャンスを有効に活用していただければと思っています。

学生サポーターも活躍

研究会の運営に参加する“学生サポーター”を募集したところ、1～2年生の女子学生6名が名乗りをあげてくれました。「最高の笑顔とホスピタリティを持ってお客様をお迎えしよう」を合言葉に、企業の方の出迎えから、開催要領の説明、会場へのご案内、資料の配布・アンケートの回収など、初日から主体的に取り組んでくれています。会の円滑な運営にこの学生パワーがおおいに貢献していることをあわせて報告いたします。

おいでませ山口へ

「わざわざ山口大学まで来ていただきありがとうございました」と学生からお礼を言われて感激した。とは、ある企業の方の話です。これから学生たちは東京や大阪、そして全国各地へ就職活動のために出向くことになるでしょう。時間もかかりますし、お金もかかります。山口大学の学生が企業の方と直接話をし、様々な出会いのなかで就職活動ができるようにとの思いで、学生支援センターは、学生にとって便利な学内での研究会開催に力をいれてきました。来年度も多くの方々に来

TOPICS

ていただくようさっそく準備をはじめます。

おいでませ山口へ。企業の皆様には趣旨をご理解の上、ぜひとも山口大学までお越しいただきませうお願いしたいと思っています。

いよいよ就職活動

開催2日目と3日目には、大学生協による履歴書用証明写真撮影会が共通教育講義棟2階の演習室を活用して開催され、予想を上回る170名がカメラマンのアドバイスをいただきながら撮影にのぞみました。スーツ姿の学生たちは真剣そのもの。いよいよ就職活動本番です。皆さん、くれぐれも健康に気をつけて、自分にとってよい職業・よい会社をめぐりあってください。この学内業界・企業研究会がひとつのきっかけとなれば嬉しく思います。



熱心に説明を聞く学生たち



質問も活発に



学生サポーター打ち合わせ中

山口大学学生支援センター 就職支援部

助教授 平尾 元彦

hirao@yamaguchi-u.ac.jp

山口市吉田1677-1 〒753-8511

TEL 083-933-5145

TOPICS

埋蔵文化財資料館公開授業

「山口の歴史にふれるー考古学からみた平川ー」を開催

横山 成己 埋蔵文化財資料館 助手

埋蔵文化財資料館では、平成15年11月8日に、市民を対象とした公開授業「山口の歴史にふれるー考古学からみた平川ー」をおこないました。この公開授業は、市民の皆様は考古学や埋蔵文化財をより身近なものに感じてもらうことを目的として、平成13年度から毎年開催しているものです。

3回目となる今年度は、吉田キャンパスが所在する平川地区にターゲットをあて、考古学的な視点から平川の歴史を学ぶというテーマでした。

授業には、平川地区在住の市民だけではなく、市内各地、遠方は宇部市から総勢14名が参加してくださいました。当日の授業内容を紹介します。

【午前の部ー考古学の調査方法を学ぼう！】

午前の部では、まず遺跡の発掘調査とはどのようなものなのか、また実際に発掘調査を行った結果、平川地区ではどのような発見があったのかを、プリントやスライドを用いて学習しました。

その後は、実際に発掘調査で出土した土器を用

いて、拓本を採る体験授業です。拓本は考古資料の記録作業の一つであり、非常に繊細な技術が必要になります。受講者全員が試行錯誤を重ねながら、熱心に取り組みました。

【午後の部ー遺跡や遺物から昔の生活を想像しよう！】

午後の部では、最初に吉田キャンパスの北に隣接する「日吉神社横穴墓群」を見学に行きました。横穴墓とは、主に6世紀から7世紀にかけて造られた墓の形態の一つです。実際に墓の内部を見学することで、当時の埋葬風習を体感しました。

その後、埋蔵文化財資料館において企画展示中の「吉田遺跡と平川の遺跡展」を観覧しました。この展示は、(財)山口県埋蔵文化財センター、山口県立博物館、山口県文書館、山口市教育委員会、広沢寺の協力により、平川地区の様々な遺跡から出土した遺物や絵図資料を一同に集めたものです。受講者からは、展示品に関する質問が盛んに飛び交い、熱気にあふれた観覧になりました。

最後に、吉田キャンパス内の遺跡保存公園で、「昔の人々の生活」というテーマで絵を描きまし



「平川の歴史を学ぶ」公開授業

TOPICS



土器の拓本に挑戦！



「昔の人はどのような生活をしていたのだろう…」と考え、絵を描く参加者

た。1日の授業内容をふまえ、昔の人々がどのような暮らしをしていたのかを、自由に想像しながら楽しく描きました。どの作品も大変な傑作となりました。

1日の授業を終えた受講者からは、「専門的な話が聞けてよかった」「とてもわくわくした」という声とともに、「平川地区のことだけではなく、他の地区のことも知りたい」「土器の破片の接合作業がしてみたい」などの声が聞かれました。

埋蔵文化財資料館は、考古学と埋蔵文化財がより多くの人々に親しんで頂けるような活動を今後

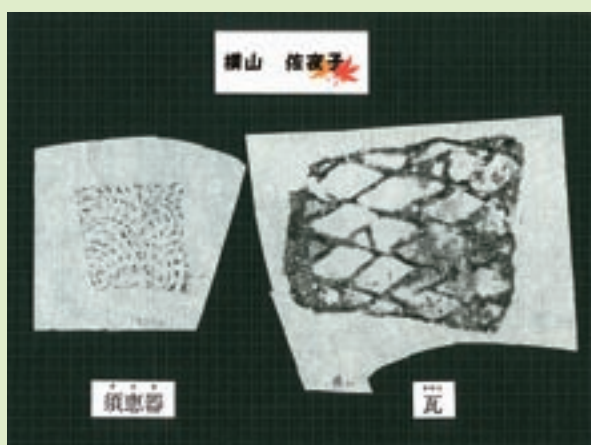
とも継続していこうと考えています。

なお、平成15年度企画展「吉田遺跡と平川の遺跡展」は、平成15年12月中でひとまず終了しましたが、観覧者からの好評につき、現在は常設展として引き続き展示をおこなっています。興味を持たれた方は、是非資料館にお越しください。館員一同心よりお待ちしております。

連絡先

TEL/FAX 083-933-5035 (内線5035)

E-MAIL shige-y@yamaguchi-u.ac.jp



TOPICS

山口大学における男女共同参画に関する意識調査の結果(上)

—— 皆さんの声をまとめました ——

山口大学イコール・パートナーシップ委員会は、平成14年度に「山口大学における男女共同参画に関する意識調査」を実施し、平成15年3月発行の「山口大学における男女共同参画推進のための提言2002年度版」において、その結果・分析を報告しております。

この意見集は、提言集に掲載できなかった多くの方の貴重なご意見（419件）を、内容によってA～Hの8つに大別し、そのなかから代表的な意見を選びそのまま記載したものです。

- A. 男女共同参画
- B. 男女平等は個人の意識の問題・意識改革の必要性
- C. 雇用・雇用形態の現状・雇用均等法
- D. 男女の性差・男女平等
- E. 制度施策の必要性・実効性・適用の仕方・能力主義
- F. 女性差別・社会的公正の実現・社会通念
- G. 啓蒙の必要性・幅広い議論の必要性
- H. その他（アンケートそのものについてなど）

今回（上）は、A～C、次回（下）5月号にD～Hの項目について記載します。

A. 男女共同参画

《「男女共同参画」の意味が不明》

- ・男女共同参画社会という言葉を知りました。もっと広く多くの人にこの活動のことや言葉の意味を知ってもらうことが重要である。私自身も分かりませんが、何を目的とし、どのような活動をしているのか分かりません。 <他14件>

《男女共同参画という言葉への違和感》

- ・男女共同参画社会については賛成なのですが、その言葉自体、時として男女差別を語るものでもあると思います。 <他7件>

《無理に実現する必要はない・すでに実現している》

- ・才能や技術、知識を持つ女性は、社会へ進出して、きちんと仕事をしている。男女共同参画社会と大きくとりあげる必要はない。男性、女性の個々の優れた性質を生かして今後もいけばよい。平常どおりでよいと考える。無理に平等にする必要はな

い。

- ・結局は、男女平等社会はありえないと思う。女性が一家の大黒柱として、働くことなんて想像できない。男は主、女は家庭というのがこれから先もずっと続いていくような気がする。それに対して、私は何の不満もないし、むしろ今まで育ってきた環境からは、一番いいのではないかと思う。平等にしてほしいという人（女性）がいるのであれば、その方たちがそうなれるように（自分達が）努力していけばよい。 <他18件>

《共同参画社会とは・その実現のために》

- ・共同参画というのは、職場、学校などで男女比率を同じにする事ではない。適材適所が必要であり、場所によっては偏りがあるのも、当然である。もっと大切な問題とは『男女が同じ社会で活躍できる場を与えられる必要がある』という意識であり数の上で男女の雇用数などそろえても、その意識が育ってない以上、共同参画は実現しない。
- ・年齢、性別、人種、宗教などの差があるが、必要なのは『平等』の意識ではなく『共同』である。仲間意識、連帯感のためのみに水準を低く下げるのは、間違いといえる。共同参画社会を目指すならば、個人ができることを少しでも参加し、その成果として、社会意識を高めていきたい。
- ・『男性らしさ・女性らしさ』があるとすれば、それは『らしさ』を引き出せるような社会『らしさ』を基本にした共同参画社会であってほしい。『すべてのことを同じにするのが平等ではない』ということ、しっかりと認識して、その上で努力したい。
- ・法律ができて、実際に実行していくことは、難しいとは思いますが、少しずつでも、前進するよう、あらゆる機会をとらえて、啓蒙したり、改めなおしたりして実行していったほしい。そして女性自身も、しっかりと現実を見つめなおして自らの手で、男女共同参画社会をつくるべく努力していかなばならないと思います。 <他35件>

《その他》

- ・（現時点では）公務員である我々にとっては、男女共同参画は実現されているほうかもしれない。男女格差は一般企業のほうが言うまでもなく厳し

TOPICS

い。男女共同参画という言葉は、最終的にどのような社会の実現を目指しているのか自分なりに考えてみましたが、具体像がなかなか思いつきません。社会意識を変える必要があるとして、どのような方向で進んでいけばよいか、日本的な社会に通うものなのか、難しい問題を含んでいると思います。

- ・少子化の影響で、日本が現状を維持する為には、女性の様々なる分野への進出は不可欠なことと考えます。ただ仕事を持った女性のみを積極的に支援しようという考え方には同調できません。このアンケートでも男女共同参画と男女間の雇用格差の是正が同義で扱われているように感じられますが、この点には疑問があります。これまでの育児の経験から男性は特に乳幼児に対しては決して母親の代わりになることはできません。家庭で育児に専念している者（男性でも女性でも）も気後れすることなく、社会に参画できるようにすることこそ重要だと考えます。
- ・私は、大学に入り女性であることの障害を感じた。お茶を入れる回数は同じであったが、女性は男性よりも手際よく、上手にいれないといけないという見方をされることがあった。そして、授業をうける上でも、あまりにも男性教員ばかりで、ほとんど女性の授業を受けたことがない。就職に関しても、自分の父親の会社の話を聞くと、男女でははっきり仕事内容が違っている。一生懸命勉強して、男性と同じだけの学力をつけても、男性は戦力、女性は雑務であれば働く気も起きない。勉強することが馬鹿らしく感じる。私は性別で能力の差が出るとは思わない。きちんと実力を確かめ合って、同じ人間として考えることが大切だと思う。

<他2件>

B. 男女平等は個人の意識の問題・意識改革の必要性

- ・女性の権利を主張しすぎても不平等になってしまいうし、かといって現状では、育児・介護就職・昇進などでは女性のほうが男性に比べて不利な立場にある気がする。結局男女に関係なく一人一人が人間として、いかに他人に対して思いやりをもてるかが大切ではないか。また自分の地位を利用したセクハラなどの問題も潜在的に校内にある気がする。この問題について大学は学生だけでなく、教職員にもっと強くやめるようにアピールしてほしい。
- ・男女共同参画社会という考え自体、男女間に差があることをふまえていると思う。人間として、仕事にいかに関わるか、人間関係を作っていくかという視点で考えれば、自然と意識差はなくなるのではないのでしょうか。
- ・日本の女性はパラサイト意識が高い。独身時代は親にパラサイトし、結婚すれば夫にパラサイトして、楽で安易な生活を望む傾向がある。男女共同参画社会にしたいのなら、男女問わずに自立した人間であるべきだと思う。男女共同参画からは少しずれるかもしれませんが、女性が男性並に仕事をしようと思えば、独身でなければできないと思う。その背景に、男性が家庭や家族を犠牲にしているというのがあると思いますが女性の場合仕事をする時間と恵まれた経済力がある独身者だけしか生き残れないのも間違っている。（こういう人が上に立つと子育てや介護をする女性たちへの配慮は絶えない）男性側の社会を家庭を重視する方向に転換させるとともに、女性側も社会の構成員としての自立を高めるべき。もっと働きながら子育てや介護している女性のパワーが社会での勢力を高めるべきで、これが当たり前の女性であるかの教育も必要ではないでしょうか。
- ・入学して、すぐに男女共同参画社会の説明を受けましたが、私たちから見ていても、やはり山大の男性教員の方の意識の低さがよく分かります。今までは、このような問題に関係なく、暮らしていたのですが、これからは就職の問題としても大きく関わってくるので、最近いろいろ考え始めました。でも、今までの日本が、男性優先で成り立ってきたので、今すぐに変わるのは、難しいかもしれません。しかし変わってほしいのは事実です。これからも人事だと思わず、自分自身にも関わってくる問題として、しっかり受けとめようと思います。
- ・男女共同参画ということを知らないので的外れるかもしれないが、男性・女性それぞれの特性をお互いに尊重しあい、思いやりをもって生活できればよいと思う。男性であれ女性であれ他人を傷つけるようなことは避け、協力しあってよりよい社会を作るべきである。もし社会的に個人の實力・能力が発揮できないようなことがあるならそれは改善するべきで、本人の意志も尊重されるべきである。一般的に女性のほうが不利であるかのように言われているが（このアンケートも）男性サイドからも考える必要があると思う。私は個人的に、今の世の中、女性がわがままになりすぎていると思っている。女性も自立できずに努力を忘れている人も多い。
- ・社会や職場が男性、女性として考えるのではなく、一人の人間として対等に、その個人の能力を理解

TOPICS

していくことが大事と思う。よって例えば、職員の男女の数が不均衡だから1:1にするとかは、本当の意味での男女共同参画とは言えないのではない。

- ・男女共同参画社会は、だいぶ進んでいると思う。男女における仕事の内容は、現時点ではまだ少し格差があると思うが、男性も仕事に対する態度を考える必要がある。
- ・個人の能力や適正が中心であって、必ずしも、男女差を最初に意識立てる必要はない。
- ・一人一人が自分自身で意識改革をしないと実現できないと思う。
- ・アンケート自体が『女性』の方に偏ってないか。私自身女性だが、疑問を感じます。(女性の立場はそんなに弱いものだろうか) まだ大学になじんでないせいでしょうか。男でも女でも、自分で意識して社会に参画しようということが大切であると思う。
- ・教育者の立場にある教授・助教授クラスの人々の態度をかえてほしい。個人の考えはいろいろあって自由で良いのだが、公共の場、特にクラスや研究室では自分達がとる行動、発言が学生全体または、地域社会全体に影響を及ぼすのだという自覚をもって、女性の学ぶ意義、社会への参画について、前向きな姿勢を示す事が大切。
- ・人が個人として尊重される考え方の普及、徹底の必要性。男とか女とか、何処の国の人だとか、役職だとか、そういうもので人を評価するような考え方ではなく、人が個人として尊重される考え方や教育の普及が必要だと思います。男女の違いをふまえながら、それぞれの、豊かさを大切にすべきだと思います。子供を産むことは、人類にとって最大に大切な事、それを守る意識制度はもっと大きくしっかりという方向を切に願います。

＜他60件＞

C. 雇用・雇用形態の現状・雇用均等法

- ・就職活動を通して、初めて男女の社会の中でそれぞれの役割の違いが分かり、実際に差を感じました。
- ・就職活動をしてみて、男女雇用が平等だと言われているが、その意味をはき違えている企業が多いと感じた。男女に同じ仕事を与えようという会社は、たいてい女性の結婚後のケアや福利厚生が不十分だった。女性に男性と同じような仕事を与えるなら女性への配慮をもっと向上させるべきだ。まだまだ女性軽視の風潮は残っている。
- ・今でも、就職の際に、女性が企業に問い合わせを

すると、『女性は採用しない』とはっきり断られるそうだ。就職には歴然と女性差別が残っていると思う。女子学生として、本当に悔しいことだ。また、女性が子育てをしながら働ける環境が整っていない。子育てをしながら働くには、パートやアルバイトという雇用形態になる。それでも雇ってくれるぶんいいが、仕事を辞めなければならないこともある。就職を希望とする女子学生として、これは納得がいかない。女性の就労に対して、固陋な考えを持つ人が多いのには驚く。最近、新聞でそういう記事をよく目にする。

- ・Q14について、女性が男性と同じ労働条件を受け入れること。現時点が、女性にとって不利なように言われるし、このアンケートもそういった視点にたっているように感じる。しかし、現実には、女性が保護されている法律や勤務先での配慮も多い。母子保健という言葉はあるが父子保健はない。単身赴任はほとんど父親である。
- ・現在パートとして大学で働いておりますが、勤務してすぐパートにもかかわらず9時から17時までの8h労働で遅いときは19時になることもあります。大学という平等社会をいちばんに目指していく場なのに、書類上は6時間勤務の残業手当なしの17時までいることを強制されてます。正社員でもなくボーナスもなく昇進もない。ただ他に就職するあてがないので、黙っていますが、こんなことが大学で当たり前のように行われています。(どの科でも)時間給がでるのが、9時から15時までならそれ以外の時間を強制するのなら労働法に違反ではないでしょうか。事務で働いているパートの方はほとんど女性、安い賃金で、しかも、就業意欲が湧かない仕事内容では、男性は生活できませんし、女性も結婚せざるを得ないと思います。改善を望みます。
- ・当直室にアダルトビデオを持ち込む医師がおり、不快に感じている。そのことを指摘したところ、『おまえも、見たんだろ』と言われ、落ち込んでいる。改善される様子もなく、モザイク消しのビデオを見た感想を女医相手に語る。現在の仕事にはやりがいもあり、魅力を感じているが、深夜まで続く労働条件(規律上ではなく慣行上男性医師の中では、女医医師が休みを取ることに対して、不平等を感じると公言される方もいらっしゃいます)では辞めざるを得ないのではないかと考えている。

＜他30件＞

＝以下(下)、次号へ続く＝

TOPICS

異文化交流講演会

静かな言語 ～手話の世界～

増田 奏衣 人文学部 言語文化学科 4年



音が存在しない世界。私は生まれてから一度もそのような世界を体験したことは無い。なぜならそれは、私の耳が音を聞き取ることができるからである。

2003年11月14日、山口大学・大学会館内の一室で講演会が開かれた。講師は森壮也氏。アジア経済研究所、東大先端科学技術研究センター勤務、また、日本手話学会会長と様々な分野で活躍されている方である。今回は「もうひとつの異文化～ろう者の世界～」というテーマで講演のため山口まで足を運んでくださった。

森氏もまた音の無い世界で生活する一人である。普段、私達、聴者と呼ばれている人々は耳の聞こえない人々のことを「聾者（ろうしゃ）」、「聴覚障害者」と呼ぶことが多い。ただ、これは聴者側の誤ったイメージで用いられていることが多いようである。特に、「聴覚障害者」という言葉は聴者側の基準が生んだ言葉である。つまり、聞こえないこと＝障害＝普通でないという判断である。

森氏はこの判断は間違っていると話す。生まれてからずっと音の無い世界で生活してきた人々にとっては、聞こえないことのほうが普通であり、私達が話す言葉と同じように手話という言語を用いて普通にコミュニケーションを楽しんでいるのである。ただ、社会に出て聴者と関わり合うことになると、やはり耳が聞こえないということは苦勞も大きいようである。

音の無い世界のコミュニケーション

音の無い世界でコミュニケーションを取るには、まず手話ができるということが求められる。これは、手話という言語を用いるコミュニティーに属していることが条件となってくる。もし、聴者ばかりがいるコミュニティーで一人だけ聾者だったら。その場合コミュニティーに属することができないために手話を習得できない。また逆に、聾者同士が手話で話している中に聴者が混じっているケースがある。

このようにみると、手話も英語やドイツ語のようにそれを用いるコミュニティーに属して習得しなければならない「言語」であるが、習得してしまうと聴者も聾者も同じようにコミュニケーションが取れるのだと改めて気付くことができる。

ただ、現実的には聴者と聾者の間にある壁はまだまだ大きい。手話や聾文化について理解している聴者が少ないことや、聾者が聴者のことを敬遠してしまいがちになることが、お互いの壁を破ることが出来ない原因となっている。また日本の法律の中にも壁が存在する。「欠格条項」を知っているだろうか。身体に障害を持つ人々にはまだ取得



「幼いうちに手話の習慣を」と話す森講師

TOPICS

できない免許や認められないものがある。

例えば医者などはその類に入る。森氏は、「聴者には聴者の、聾者には聾者の世界があり、この世界を自由に行きかうことは非常に難しい。また、聞こえる聞こえないという判断だけではなく、聾者にはコミュニティーが存在し、その中で手話という言葉が用いられるということを聴者の人々にも理解していただきたい。」と語った。

手話とは何か

ここで手話とは何かということについて触れてみたい。よく、「手話」というのは「手を使って話す」「視覚言語である」と思われているが、それは不十分なものである。私達は「日本語とは？」と尋ねられたときに「口を使って話す」「聴覚言語である」と答えるだろうか。言語とは、使用する身体部位が問題なのではない。意思疎通が図れるように、コミュニティーの中での約束事(＝文法)が存在することが重要なのである。つまり、「日本に住む聾者が毎日の生活の中で使い、日本語とは異なる文法を持つ」のが、森氏の使う「手話」なのである。

私達は、手話は世界共通語で、どこの国にいても通じるものだと考えがちであるが、それは大きな誤解だ、とも森氏は言う。手話にも「日本手話」や「アメリカ手話」というものがあり、その表現方法には明らかな違いがあるのだそうだ。また、聾者が受けやすい誤解として聾者は表情がとても豊かだということがある。しかし、これはただ単に表情が豊かなのではなく、「非手指動作」として表情を用いて文章に疑問や否定、感情を加えているのである。

講演の中で驚くべき事実を知った。実は、聾学校では手話を教えていない、さらに手話の授業も無いというのである。では、世の中で手話を使ってコミュニケーションを図っている聾者の人々は、どうやって手話を会得しているのか。その答えは、聾学校の寮にあった。多くの聾学校には寮があり、その中で多くの聾者の学生が生活している。つまり、手話を知らない子は24時間、手話ができる子の中にいることで、自然と手話を覚えていくという仕組みになっている。

手話ができる子というのは、やはり手話のできる親、多くの場合は聾者の親のもとで小さい頃から暮らしている。しかし、こういった家庭内、仲間内での手話というのはどちらかというとイン

フォーマルな手話が多い。そのために、ちゃんとした場で使う手話を身に付けていない人もまだまだいるのが現状だそうだ。

特別支援教育に異議

教育面に関して、文部科学省は「特別支援教育」というのを設けている。これは幼児部、小学部で話し言葉(音声言語)を習得し、中学部、高等部になってから手話を学ぶというものである。これには、1880年ミラノ聾教育国際会議において、音声言語習得を最重要とする聴覚口話法が決議されたという背景がある。森氏はこれに異議を唱えている。聾児の臨界期(言語獲得機会が失われてしまう時期)は非常に早く、それを逃してしまうと、手話はおろか学習にまで支障をきたしてしまうのである。幼いうちに手話の習得を終えることで、自ら学び、考え、発想する力を聾児たちが持つことができるだろうと森氏は話した。

通訳の方の話も交えつつの2時間の講演はあっという間だった。参加者もその間、真剣に森氏を見つめ、耳を澄ましていた。ようやく多くの人々に認知されるようになってきた手話。私もその存在は知っていたし、テレビなどで見ることもあった。しかし、こんなにも手話が言語としてしっかりと確立されていること、そして様々な問題を抱えていることは、今回の講演に参加しない限り、知ることはできなかっただろう。

長い間、一生懸命手で話してくださった森氏に心から感謝したい。そして、音のある世界に住む私達と、音の無い世界に住む人々がいつか互いの文化を自分の言語だけでなく、お互いの言語を使って話せる日が来ることを願っている。



うなずきながら熱心に聞く参加者

TOPICS

山大が動き出す4!!

山口大学VI（ビジュアルアイデンティティ）プロジェクト
広報活動専門委員会



マニュアル作り

シンボルマーク・シンボルカラーが決まり発表された後、どのように使うかの基準を定める管理マニュアル作りを進めています。

発表後、様々な分野でマークを使いたいという問い合わせがありました。4月からの正式な使用に先立ち、どうしても緊急を要する場合を除き管理マニュアルができるのを待ってもらっています。

使う場所によってマークの大きさ、マークと山口大学の文字の大きさのバランス、モノクロ印刷時のマークの選定、名刺・封筒・パンフレットを作る場合のレイアウトなど、実際に使うにあたって迷う場合がたくさん出てきます。

管理マニュアル作りが進行中ですが、基本的な考え方として守らなければならない部分をできるだけ少なくすること、応用例をたくさん示してその中から選んで使えるようにパターンブックを添えることを検討しています。マニュアルのねらいはこのマーク・カラーをできるだけ広く活用してもらうことを第一に考え、使い方の管理だけでなく広く使ってもらうためのデザインのアイデアを示したものも含めることにあります。管理マニュアルではなく、管理的内容も含めたデザインマニュアルを作ろうとしているのです。なお、マニュアルが完成した時点で、使い方の説明会を開く予定にしています。

これまで大学をアピールする公的な印刷物にマークを使う場合について話を進めてきましたが、もう一つの大事なこととして学生のキャンパスライフでこのマークに広く親しんでもらうことを考えています。それはデザインを選ぶ過程で、学生から一筆書きで描けるようなシンプルなものが多いという意見が出されたことがきっかけです。それまでは言うなれば家紋を作ろうとしていたわけですが、マスコットマークとしての広がり期待できるものという新たな視点が出てきたわけです。決定案は広がりのための条件を満たして

おり、マニュアルでは学内における印刷媒体以外のコミュニケーションツールに限り手書きを認めるとして、手書きで描く場合の事例もマニュアルには示す予定でいます。もとより事例から選ぶのではなく、学生がサークルのユニホームなどへマークを自由にアレンジして使ってくれることを期待しているのですが。

デザインマニュアル作りの一方で、知財本部からのアドバイスをもとに商標登録の申請を行いました。また、グッズ販売に向けての調整も進めています。

YAMAGUCHI UNIVERSITY
DESIGN MANUAL

イメージデザイン
■カラー

BASIC DESIGN

04

●カラー表現の場合

カラーは大学のイメージ定着のための重要な要素です。
指定の色番号を参考になるべく忠実に再現してください。

シンボルカラー	●特色の場合 (CMYK)	●特色の場合 (TOYO)	●プロセスの場合 (4色カラー)
	N-863 (日本の伝統色6版)	CF0298 (TOYO 94)	シアン 100% マゼンタ 15% イエロー 75%
	N-836 (日本の伝統色6版)	CF0235 (TOYO 94)	シアン 45% マゼンタ 5% イエロー 75%
	540 (DIC 18版)	CF0998 (TOYO 94)	ブラック 75%

TOPICS

YAMAGUCHI UNIVERSITY
DESIGN MANUAL

BASIC DESIGN
05

●2色表現の場合

シンボルカラーとロゴカラーの場合

シンボルカラー100%

シンボルカラー50%

ロゴカラー100%

YAMAGUCHI UNIVERSITY
山口大学

●単色表現の場合

シンボルカラー1色の場合

アミ50%

ロゴカラー1色の場合

アミ50%

YAMAGUCHI UNIVERSITY
山口大学

YAMAGUCHI UNIVERSITY
山口大学

使用する素材や使用するサイズなど印刷条件によってはアミ処理をせず、すべて単色100%の表現もできます。
その他に金色、銀色が使用できます。

YAMAGUCHI UNIVERSITY
山口大学

YAMAGUCHI UNIVERSITY
山口大学

YAMAGUCHI UNIVERSITY
山口大学

YAMAGUCHI UNIVERSITY
山口大学

YAMAGUCHI UNIVERSITY
DESIGN MANUAL

BASIC DESIGN
10

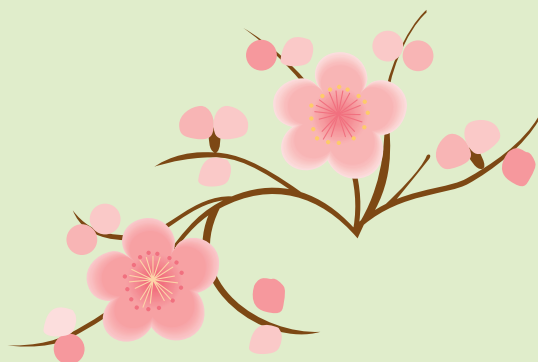
●手書きでの表現

このシンボルマークの再現については、学内における印刷媒体以外のコミュニケーションツールに限り手書きでの表現を認めます。
印刷媒体となる場合は必ずデータを使用して再現してください。

手書きで正確に再現する場合は、右のグリッドを参考にしてください。

手書き表現例

マーク隣接例



私の研究

“解析的整数論”

木内 功 助教授
理学部 数理科学科

素数との出会い

私は学生時代より、素数や約数など具体的な対象に興味を覚えていた。E.C.Titchmarsh のリーマン・ゼータ函数論の本は1940年代後半までの素数分布論を解析的な方向から研究された成果が記載されているバイブル的な存在の本で、私も長い間手に入れたいものだと思っていた。そのころ私は中野の鷺宮に下宿していたが、勉強のあと疲れを癒すため、散歩をかねて高円寺駅ガード下の古本屋までよく出かけた。あるとき3千円（当時）でこの本を見つけ、驚喜して買い求めたことを思い出す。これ以後この本は私の愛読書となった。これが初めて本格的に素数と出会ったときだったのかもしれない。

これまでの研究

その頃から、解析的整数論の素数に関する研究を開始した。研究は、計算、思索、新しい論文の読了の繰り返しである。ある日、数学教室の新着雑誌の中から、M.Jutila氏の論文を見つけた。彼は約数問題に関する研究の権威で、その論文では約数関数に重み付けした数論的関数を取り扱っていた。

このテーマは Titchmarsh の本でも読んでおり、たいへん興味があったので、一見“一般化できる”と確信した。その確信のもと計算を続け、最終的には私の修士論文となって後に国内雑誌に掲載された。

その後も Dirichlet の約数問題に関連するゼータ函数の解析的な性質に関する研究を、中心的に行ってきた。ゼータ関数の漸近的挙動を正確に把握するために近似関数等式が Hardy-Littlewood の頃から考えられていたが、1980年代まで特に進展はなく、この方向は非常に困難とされていた。このような場合リンデレーフ予想に注目して、“平均値化”により直接的ではないが間接的に解析的な性質を研究することができる。

私は、リーマン・ゼータ函数の平方に関する

近似関数等式の本橋公式の残余項における平均値公式を提案し、残余項の漸近的な挙動を調べた。この研究は、二乗平均公式から初めてベキ乗平均値公式、臨界線から臨界域へと拡張され、最後には扱う近似関数等式自体が、対称型から非対称型にまで及ぶものとなった。

さらに、リーマン・ゼータ函数の平均値公式に関する残余項の漸近的挙動および解析的性質の解明のために、短区間に関するある種の平均値化を考察することは、局所的な振る舞いを知る上でも重要であると考え、短区間の積分公式を研究した。これらの主要な道具は一般化されたヴォロノイ型の漸近公式である。それから導き出される平均値公式を10年以上研究してきて、いまはある程度の完成の域に達したと考えている。

趣味をもって

研究というのは長いスパンで考えるもので、その間にはうまくいくときもあるし、スランプに陥ることもある。スランプの時は、いくら計算をしても出口が見えず苦しいもので、こういうときというのは一つの見方にとらわれていることが多く、他の論文を精読し、あるいは全く別のことをして頭を解放しなければならない。

私の場合、絵画鑑賞が好きで、学生時代からよく上野にある国立西洋美術館に通っていた。

その2階奥にあった、クールベの波の絵が特に気に入っていた。山口に赴任してからは、New York School の画家たち(R.Motherwellの言うところの)に刺激をうけ絵画制作を始めた。版画に始まり、水彩画、平面絵画と続き、最近では立体オブジェまで作るようになった。

数学の計算との格闘に疲れたとき絵画のことを考える、そうすると計算の漏れを発見して再度研究に戻る力を得る。しかし絵画の方も闇雲に製作したのではいつになっても進歩しないと思い、最近では公募展を中心に出品している。この冊子の表紙の作品は最近製作したもので、編集委員会のご好意により掲載させていただいた。

研究と趣味、この2つを車輪の両輪として、私は平均値問題以降、新たに Ramanujan 和に関連する一般化や数論的指数和の評価に関する多重化を提案し研究の展開を図っているところである。

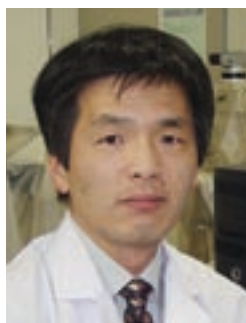
学内連絡先

TEL : 083-933-5758

E-mail : kiuchi@yamaguchi-u.ac.jp

私の研究

蛋白とグリア細胞



権藤 俊一 助教授
医学部附属病院病理部

β蛋白との出会い

高齢化社会を猛烈なスピードで迎えてしまったのが、現在の日本です。新聞朝刊の社会面に、痴呆老人の介護に疲れた家族の悲劇をみることがしばしばあります。痴呆を起こす代表的な疾患の1つがアルツハイマー病です。

私は、病理学講座に入局以来、『アミロイドーシス』の研究に携わってきましたが、アルツハイマー病は、アミロイドーシスの1つであり、『アルツハイマー病の形態学的研究』が私の研究テーマです。1991年に渡米し、カリフォルニア大学サン・ディエゴ校のGlenn博士の研究室で、アルツハイマー病の研究に従事しました。

研究の1つが、凍結保存された脳をすり潰して、老人斑だけを回収する実験でした。老人斑は、β蛋白を主成分とする構造物で、アルツハイマー病の脳には非常に多数の老人斑がみられます。β蛋白の発見者である博士には、アルツハイマー病を研究する者としての心構えや研究の進め方など、多くのことを教示していただきました。実験の合間には、多数のアルツハイマー病患者の脳組織を顕微鏡で観察していました。

老人斑のかたち

帰国してから、今年で12年目を迎えます。帰国後まもなくして、所属していた病理学講座（現在、構造制御病態学講座）に、共焦点レーザー走査型顕微鏡 confocal laser scanning microscopy (CLSM) が導入されました。

これ幸いと、アルツハイマー病の老人斑をCLSMで観察しました。老人斑は、形態によって diffuse plaque と primitive plaque、classical plaque、burn-out plaque に分類されています。しかし、CLSMでみると、老人斑は大きさや形が実に様々であることがあらためてわかりました。

次に、老人斑と神経細胞やグリア細胞との関係

をCLSMで調べることにしました。ある日、大学院生だった加藤千里先生が、グリア細胞の1つであるアストロサイトで周囲を囲まれた classical plaque の画像をものにすることができました。いま振り返ってみても、幸運に恵まれた one shot と思います。

さらに、1つの老人斑を連続して撮影した50枚のCLSM像を、画像処理ソフトを使って『三次元的再構築』を行いました。得られた老人斑の立体像は、海に生息するサンゴを連想させるものでした（写真）。

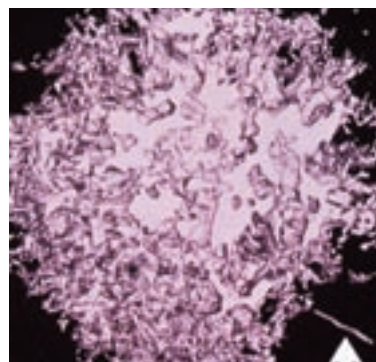
Cerebral amyloid angiopathy

β蛋白は老人斑を形成するだけでなく、脳の血管壁にも沈着し、脳血管アミロイドアンギオパチー cerebral amyloid angiopathy(CAA) を起こします。アルツハイマー病でもみられますが、痴呆とは関係なく、CAA だけがみられることもあります。β蛋白が沈着した血管壁はもろいため、CAAは脳出血の原因となります。

あるとき、ひとりの患者さんが亡くなって、病理解剖をさせていただきました。痴呆も脳出血もない患者さんでしたが、脳の血管にβ蛋白が多量に沈着していました。CAAの未出血例です。CLSMで観察すると、血管壁にβ蛋白が高度に沈着し、血管壁には老人斑様形態を示す perivascular amyloid deposits が多数形成されていました。今度は、アストロサイトが perivascular amyloid deposits の周囲を取り囲んだ像だけでなく、別の種類のグリア細胞であるミクログリアで囲まれた像も撮影することができました。

これからも形態学で

平成14年4月に、私の所属が附属病院の診療部門の1つである病理部になりましたが、研究テーマは同じです。アルツハイマー病の発生機序は、最近の研究により、ようやく解明されようとしています。しかし、まだわかっていないことがたくさんあります。CAAについても同様です。これらの病気におけるβ蛋白とグリア細胞の役割について、形態学に基づいた研究を続けようと思っています。



学内連絡先

TEL : 0836-22-2220

FAX : 0836-22-2219

E-mail : gondou@yamaguchi-u.ac.jp

教官著作書の紹介



「幸せになる犬との暮らし、一犬と友達になるための7つの知恵」

小暮規夫監修、共著者全7名、「第7章、犬にも大事な食生活」早崎峯夫著
(株ベネッセコーポレーション、1996年12月)

犬を飼うことにより、ヒトの日常生活が精神的に豊かになり充実した日々を送っている飼い主は多い。これらの動物を伴侶動物と呼び、飼い主は飼えば飼うほど犬を正しく飼ってあげたい、犬の正しい飼い方を知りたいと切望している実状にある。この要望にこたえるために本書の刊行が企画された。本書の構成は、第1章 犬とヒトとのおつき合い（林 良博、東京大学）、第2章 犬の心と超能力（沼田陽一、作家）、第3章 犬種と性格をどう選ぶか（富澤 勝、農水省家畜衛生試験場）、第4章 犬と遊ぼう（井本史夫、動物病院院長）、第5章 犬と良い関係をつくる（藤井邦蔵、犬訓練士学校教頭）、第6章 わが家の犬の健康管理（小方宗次、麻布大学）そして第7章（著者）からなり、いわゆる入門編的なレベルの楽しく読める内容となっている。[本書はその後、同著者7名による加筆修正の上、再構成されて、同一題名（林 良博編、幻冬舎文庫、2003年5月）にて文庫本として刊行された。



「R・ウォルターの犬と猫の栄養学」

早崎峯夫監訳、共訳者5名（日本臨床社、1991年3月）

フランス、アルフォール獣医大学R. ウォルター教授のフランス語著書の翻訳本。従来、わが国では家畜の栄養学研究は乳牛の泌乳量増加、豚の肉質の向上と体重増加あるいは鶏の産卵率向上を目的とした畜産動物が対象の研究が主流を占めた。これに対して、伴侶動物（犬や猫）の動物種別あるいは品種別の栄養学、正常な発育・成長のための栄養学あるいは老犬のための栄養学、病気治療のための栄養学（糖尿病食、腎臓病食などの開発）、そして病気予防・抵抗力強化のための栄養学の研究が欧米を中心に充実してきた。日本に入ってくる最新知識のほとんどは米国の研究成果であるが、ヨーロッパでも進んでいて、中でも特に進んでいるフランスの犬と猫の栄養学を紹介した。



早崎峯夫 教授 農学部 附属家畜病院

TEL : 083-933-5896 E-Mail: hayasaki@agr.yamaguchi-u.ac.jp

教官著作書の紹介



『文化として学ぶ物理科学－新しい学びの場を求めて－』

山下芳樹氏と共著（丸善、2003年7月30日）

多くの高校生や大学生にとって、物理は最も難しい科目の一つであろう。特に、文科系指向の強い大学生にとっては、昔から物理は全く理解できない科目として嫌われてきた。

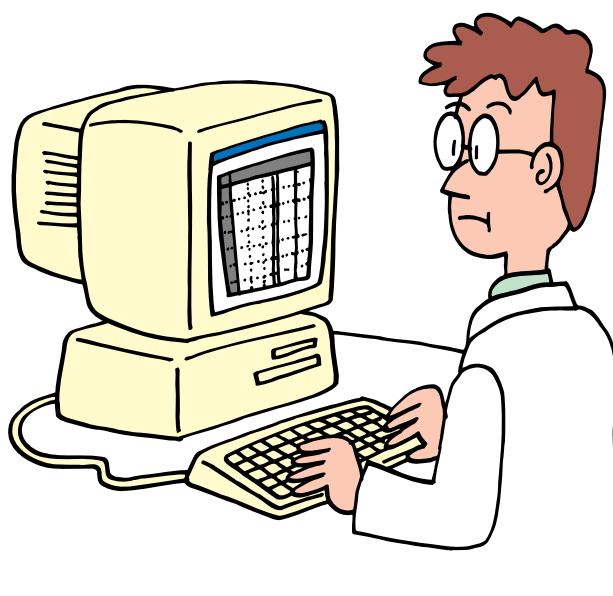
なぜ物理はこれほどまで嫌われるのか。物理学はすべての自然科学の基礎であるので、この問題は理科教師にとっては大きな課題である。本書には、この問題に答える一つの試みが示されている。このために、本書は物理学の一般の教科書とは内容や構成において大きな相違がある。随所に会話文を取り入れているのはその一例である。

力学は物理科学の基礎として重要であるが、高校生や文科系の大学生のみならず一般人にとっても、その概念を理解することはとても難しい。物理概念を理解するためには、彼らが日常体験から得た「常識」を捨てて、いわば非常識な世界の思考を受け入れなければならないからである。本書では、「慣性の法則」に焦点を当てて、科学史の事例研究に基づきながら、科学における思考の壁を破るおもしろさを示した物理科学の入門書である。本書が想定している主な読者は、文系の大学生（特に、教員志望の学生）、学校の先生、および科学に興味をもっている高校生である。



池田幸夫 教授 教育学部 理科教育教室

E-Mail: y.ikeda@yamaguchi-u.ac.jp



新聞掲載された山大・地域から見た山大

12月

- ◆ ウベニチひろば 『地震予知』 小話
山口大工学部教授 山本 哲朗氏
(ウベニチ：16日)

1月

- ◆ 各界からの新年のあいさつ
地域のため知恵総動員
山口大学学長 加藤 紘
60周年を改革の好機に
山口大学医学部長 石原 得博
(ウベニチ：6日)
- ◆ **大学** 大競争時代
ニーズ反映へ共同研究 市民講座や医療連携も
山口大編 地域貢献 (山口：6日)
- ◆ **大学** 大競争時代
予算削減や配分格差 「教育、研究阻害」指摘も
山口大編 懸念 (山口：7日)
- ◆ 土砂災害の危険度から見た家屋の立地条件
山口大学工学部 山本 哲朗教授
(ウベニチ：8日)
- ◆ **未来の街作り戦力探る** **山口で17日シンポ**
下関市、萩、柳井市長が参加
吉村弘山口大経済学部教授がパネリスト
(山口：10日)
- ◆ 家屋の耐震の重要性を考えよう
——1995年阪神淡路大震災・
2003年イラン地震からの教訓——
山口大工学部教授 山本 哲朗氏
(宇部時報：15日)
- ◆ **自主防災組織の構築訴える**
防災とボラ講演会 普段からの知識習得も強調
(ウベニチ：16日)
- ◆ 受験生迎える準備整う
きょうからセンター試験
(中国・読売：17日、読売・朝日：18日、読売：19日)
- ◆ 山大工学部長に三木教授を選出
—山口大工学部—
(山口・朝日・中国・読売：17日)
- ◆ 自主防災を強調
山口市で山大教授ら講演 (防長新聞：18日)

- ◆ 山大がシンボルマーク
4月から法人化に合わせ (毎日：20日)
- ◆ **肝硬変患者の再生治療**
「期待通りの効果」
山大付病院 切開せず骨髄細胞注入
(山口・中国・朝日・毎日：20日、読売：21日)
- ◆ 知ってる？ 「阿武火山群のふしぎ」
萩市・越ヶ浜小で記念授業
—山口大総合科学実験センター
永尾隆志助教授—
(読売：20日)
- ◆ **中四国国立の美術・音楽**
あすまで山口に集結 (山口：20日)
- ◆ **広中前山口大学長に仏勲章**
科学の研究交流に貢献
(中国・山口・朝日：22日)
- ◆ 山大農学部長に古賀教授を選任
(朝日・山口：23日)
- ◆ 産学官交流会に110人 「循環社会」テーマに
パネルディスカッションに
山口大 村田 秀一教授参加
(山口：23日)
- ◆ **学生パワーを地域に行かせ！**
メディアエイター、2月発足
地域と学生をコーディネート
(サンデー山口：24日)
- ◆ 増加する竹林有効活用考えよう
NPOが環境シンポ
あす山口で 山口大の丸本卓哉副学長講演ほか
(朝日：24日)
- ◆ ウベニチ ひろば
地震に強い住まい
～木造家屋の耐震診断～
(ウベニチ：27日)
- ◆ やまぐち夢追い人 私の研究人生
山口大教育学助教授 森岡弘さん
Q「ロボット」は何語？
ものづくりの楽しさ知って
(毎日：29日)
- ◆ 地震への意識高めよう
県防災・砂利ボランティア協
山口 総会や講習会に120人
(中国・宇部時報：29日)

新聞掲載された山大・地域から見た山大

- ◆ **大学発ベンチャー11社**
03年中国地方 産学官コラボセンター調べ
バイオ・医療・ITが中心（中国：30日）
- ◆ 1. 1 倍昨年上回る
国公立大二次出願中間集計
中国地方14校は0.7倍
（中国・西日本：31日）

2 月

- ◆ 男女共同参画社会への講演会
山大、19日に一般公開
（山口：4日、サンデー山口：14日）
- ◆ 国公立2次出願締め切り
山口大の志願倍率5.1倍 （読売：5日）
- ◆ 「大学と町の橋渡しを」
学生発 **地域交流の試み**
山口大・県立大・山口 芸術短大
会発足へ 学園祭など合同で計画
（朝日：6日、山口：8日）
- ◆ 山大エクステンションセンター
15日に特別講演会
（宇部：6日、防長：7日、サンデー山口：8日）
- ◆ **人** **世界を視野に地域と歩む**
学部・大学院づくりを
山口大工学部の新学部長 三木俊克さん
（宇部：10日）
- ◆ **「知的クラスター創成」宇部地域採択**
「新しい医療機器バレーを」
県・山大 事業展開に意気込み
（読売・毎日・日経・朝日・山口：11日）
- ◆ **交遊抄** ネズミの出産
山口大学学長 加藤紘氏 （日経：11日）
- ◆ 生き方のアイデア作品に
山大生が卒業制作展 （山口：13日）
県立美術館で教育学部美術専修学生ら
（山口：13日）
- ◆ ベンチャー投資会社社長らに
学生がアイデア披露 山大生と県立大生
（朝日：11日、読売：13日）
- ◆ **顔** フランス最高の勲章を授与された
数学者広中 平祐さん
「数学と芸術には共通点」 （読売：11日）

- ◆ **山口大・4 国立病院** **山口銀、メインバンクに**
独立行政法人移行に対応
（日経・山口：13日）
- ◆ **大学競争時代個性決め手** **大学工学部本社調査**
単科大、地域密着で成果 山口大（13位）
（日経：16日）
- ◆ 地元企業から卒業研究テーマを
山口大が募集 （宇部時報：17日）
- ◆ 高校生ら実験に挑戦 ー山口大ー
伝子操作の研修会 （宇部時報：17日）
- ◆ 地震に強い住まい
山口大工学部教授山本 哲朗氏
鉄筋コンクリート造家屋の耐震診断
（ウベニチ：17日）
- ◆ 電波望遠鏡で新宇宙感じて
ー山口大理学部藤沢健太・助教授ー
山口高で観測会 （朝日：17日）
- ◆ 山口大学教育学部 卒業制作展
（サンデー山口：18日）
- ◆ **もっと男女共同参画社会に関心を**
一橋大・木本教授 山口大で講演会
あす開催、参加自由 （朝日：18日）
- ◆ 私の研究人生 探る 究める 見つける
Q光触媒って何？
実験重ね結果導く
ー山口大理学部助教授 山崎 鈴子さんー
（毎日：19日）
- ◆ 受験生迎える準備OK
県内3国公立大 きょう二次試験
（中国：25日）
- ◆ 山大に3857人挑む ー国公立大二次試験
（読売・朝日：26日）
- ◆ 「携帯」の部品世界最薄化 ー山口大と日立金属ー
大容量化可能に
（中国・日経・山口・毎日：26日）
- ◆ 危機管理手引作成へ ー山大ー
（山口：27日）
- ◆ 第2回山口大知的財産シンポ
特許の取得や活用法学ぶ （宇部：27日）
- ◆ 女性の尿漏れ 電話無料相談
来月3日間、山大病院 （宇部：27日）

原稿をお寄せ下さい

広報誌は、学内だけでなく、山口県内の高校以上の教育機関、地方自治体及び主として、中国・四国地区の企業等学内外の約500の機関に配布します。

ア．Q&A欄について

山口大学についての質問をお寄せください。質問は、お名前、所属、職（学生の場合は学年）、年齢を付して文書でお願いします。Q&A欄に採用させていただくときには、字数などの関係で文章を一部修正させていただくことがありますのでご了承ください。学外からの質問を歓迎します。

イ．催し物について

公開講座、学会、研究会等の開催計画がありましたら、日時、場所、名称、責任者氏名、所属、電話番号などをお知らせ下さい。

ウ．「私の授業」「私の研究」「国際交流」「山口大学の将来についての提言」など

「私の授業」「私の研究」では、日頃おやりになっていることを、高校生にもわかるように、やさしく述べていただければと存じます。また、昨今、大学の将来についての関心が高くなっています。そこで、山口大学の将来あるべき姿について、学内外から原稿をいただければ幸いです。建設的なご意見を期待します。

【執筆要項】

上記ウについて、執筆要項は次のとおりです。

1. 原稿（図、表を含む。）は40字×40行で、できるだけパソコンでお願いします。第1行は題名、2行目は氏名、所属部局名、研究室あるいは講座名、職、本文は4行目から始めてください。本文は3～4に区分し、小見出しをつけて下さい。

読者が連絡や質問をされる場合に便利かと思えますので、お差し支えなければ、原稿の末尾に研究室などの電話番号を括弧書きにしてください。

原稿は次のような形になります。

パソコンを用いない場合は、400字詰原稿用紙4枚以内で、パソコンの場合の要領に準じてお願いいたします。パソコンで原稿を作成された場合、お差し支えなければ原稿と一緒にフロッピーをお貸しいただければ幸甚に存じます。

第1行 題名
第2行 氏名、所属部局名、研究室名、職
第3行 （空白）
第4行 本文始まり
・
・
第40行 本文終わり
(TEL_____)

2. ご自分が写っている写真を1枚と本文に関連する写真も添付してください。研究や授業の場面の写真を歓迎します。

原稿には締切期限を設けません。適宜、下記までお送りください。そのほか、種々のお問い合わせも下記まで。また、原稿はE-mailで送っていただいても結構です。

〒753-8511

山口市大字吉田1677-1

山口大学総務部総務課（総務課広報室）

広報・調査係長 後藤 明利

TEL.083-933-5007 FAX.083-933-5013

E-mail:SH011@office.cc.yamaguchi-u.ac.jp

編集後記

毎年、1月後半からは卒業論文や修士論文のまとめの時期になり、学生が書いた文章の添削に明け暮れます。自分も含めて、物事を分かりやすく他人に伝え、伝えられたことを正確に理解すること、つまりコミュニケーションすることは、本来はとても難しい作業です。伝える側と受け取る側、両者の努力が重要なのだと思います。

今回の特集は、この春定年退官する教職員のメッセージです。ご紹介できなかった方の中にも、高度成長から安保闘争、大学紛争、しらけ世代、モラトリアム世代、バブル景気、そしてバブル後と様々な時代の大学の姿をご存知の方がいらっしゃると思います。その時々、どのように取り組んできたかという経験は、山口大オリジナルの貴重な情報とも言えます。

4月からは、国立大学法人への移管という、大きな変化が始まります。いままで蓄積されたノウハウを正確に読みとり、活用する努力を一層強くしなければなりません。「次代」の一端を担う私たちと、諸先輩方の新たなコミュニケーションの始まりです。

農学部 助教授 横山和平

©山口大学ホームページ http://www.yamaguchi-u.ac.jp/index_j.html

山口大学広報第七十号

平成十六年三月二十二日発行

編集発行 山口大学広報委員会

(総務部 総務課 広報室)

住所 山口市大字吉田一六七七一

電話 (083) 933-5007

FAX (083) 933-5013

E-mail SHO11@office.cc.yamaguchi-u.ac.jp

印刷 株式会社ふじたプリント社

広報活動専門委員会委員

小谷 典子 (委員長 人文学部)

坪郷 英彦 (人文学部)

福田 隆眞 (教育学部)

マルク・レル (経済学部)

小宮 克弘 (理学部)

高橋 睦夫 (医学部)

宮本 文穂 (工学部)

横山 和平 (農学部)

野島 真治 (附属病院)

専門委員

堀江 穆 (アドミッションセンター)

熊谷 武洋 (教育学部)

木下 武志 (工学部)

杉井 学 (メディア基盤センター)